

# 寺本廃寺跡

山梨県史跡寺本廃寺 試掘調査報告書

平成24年3月  
笛吹市教育委員会

## 序

甲府盆地のやや東寄りに位置する笛吹市は、「甲斐国千年の都」をスローガンにその豊かな歴史と文化財を生かしたまちづくりを進めております。特に、岡銚子塚、竜塚、姥塚などの古墳や甲斐国分寺跡、国分尼寺跡などの古代寺院史跡については、保存活用に向けた調査が実施されています。

今回報告する寺本廃寺跡は、山梨県最古の寺院跡として知られ、過去にも山梨県教育委員会、春日居町教育委員会で発掘調査が行われています。これらの調査成果により、中心伽藍及び寺域の範囲が分かってきました。一方で、研究者からは金堂、塔、講堂の位置が近すぎるなどの指摘があり、笛吹市教育委員会では、寺本廃寺の不明確な部分の解明と、過去の発掘調査データの検証を目的として、平成19年度以降試掘調査を実施するとともに、併せて過去に行われてきた試掘調査データを新たな視点で見直す作業を進めてきました。

その結果、講堂がこれまでの想定位置よりも後退する可能性が高いなど一定の成果を上げることが出来ました。笛吹市では、これらの成果を報告するとともに文化庁、山梨県教育委員会の指導のもとで寺本廃寺跡の保存整備に役立てていきたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査にご理解、ご協力をいただいた地権者をはじめ、山梨県教育委員会、山梨県文化財保護審議会、調査検証にご指導いただいた研究者各位に感謝申し上げるとともに、本書が広く活用されることをご期待申し上げ、序文にかえさせていただきます。

平成24年3月  
笛吹市教育委員会  
教育長 山田武人

## 例　　言

1. 本書は、山梨県笛吹市春日町寺本における山梨県史跡寺本庵寺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成19年度より平成23年度にかけて笛吹市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成19年度を笛吹市教育委員会文化財課小瀬忠秋、溝内淳介が担当し、平成20年度から23年度を望月和幸が担当した。
4. 本書の執筆、編集は笛吹市教育委員会文化財課、望月和幸が行った。
5. 本書に掲載されている遺物、図版、写真は笛吹市教育委員会で保管されている。
6. 本書に掲載されている挿図、図版は笛吹市教育委員会文化財課 望月和幸が担当した。
7. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の機関、諸氏からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。  
笛吹市春日町寺本区、文化庁、国立歴史民俗博物館館長 平川南、国士館大学 須川勉、東京大学大学院 佐藤信、山梨学院大学 十菱俊武、山梨大学 大隅清陽、東京医療保健大学 三舟隆之、笛吹市文化財保護審議会 谷口一夫、長沢宏昌、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター 小野正文、山梨県立博物館 中山誠二、山梨県文化財保護審議会史跡部会、財団法人山梨文化財研究所 宮沢公雄、平野修、韮崎市教育委員会 鹿野義朗、山梨県考古学会、山梨官衙研究会、
9. 調査組織

調査事務局 山田武人（笛吹市教育委員会教育長）

早川哲夫（笛吹市教育委員会教育次長） 平成19～21年度

中澤和朗（笛吹市教育委員会教育部長） 平成22年度

小川勝明（笛吹市教育委員会文化財課長） 平成19年度

中山孝仁（笛吹市教育委員会文化財課長） 平成20～21年度

小瀬忠秋（笛吹市教育委員会文化財課長） 平成22～23年度

調査担当者 小瀬忠秋・溝内淳介（笛吹市教育委員会文化財課） 平成19年度

望月和幸（笛吹市教育委員会文化財課） 平成20～23年度

発掘調査作業員 馬渕泰藏、榎原千代子、保坂洋、野沢きみ江、橋田ぎん子

馬渕松子、志茂、藤、名取正司、花村玲子、鎌木智恵美

荒川奈津江、荒川公子、土屋美保子、天川陸美、竹越妙子、矢崎綠、

吉岡和恵、高野眞寿美、藤巻淑子、鎌木幸子、神澤時子、三神佳美、

岡美代子、矢崎暎美、山貝美春、佐野克也

室内整理作業員 小田切健吾、高野眞寿美、渡辺利江、藤巻淑子、藤原さつき、

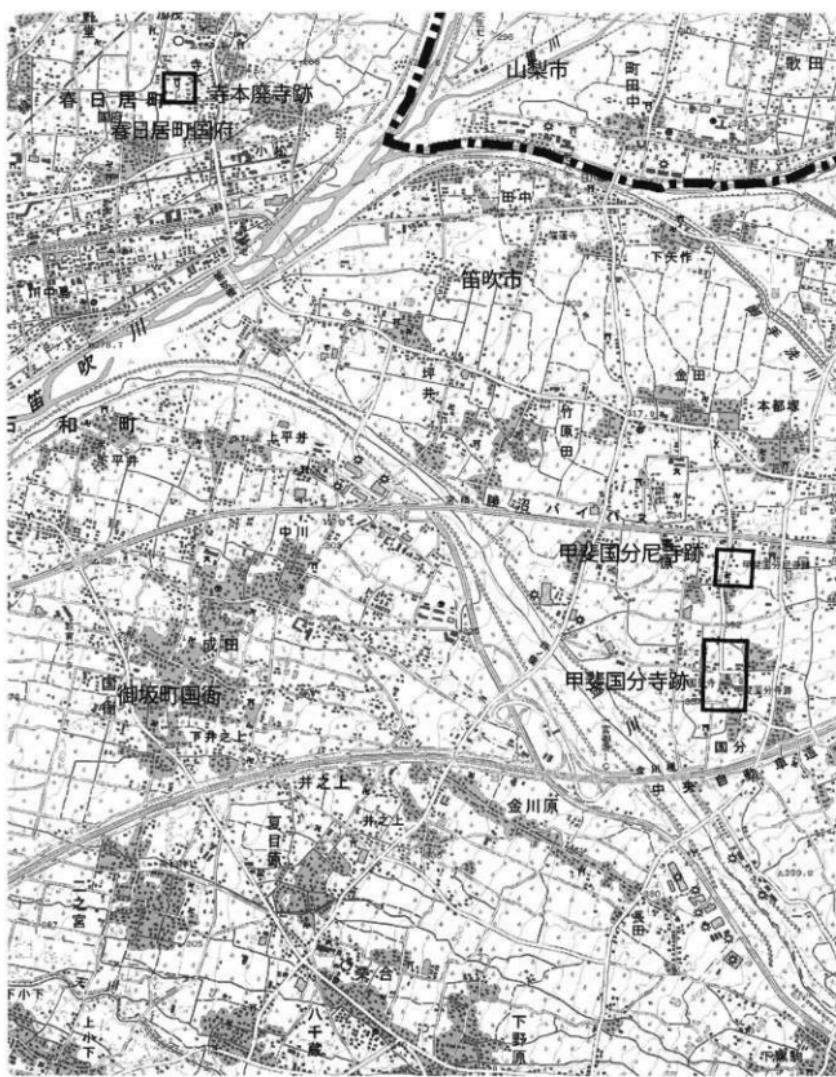
角田万紀

## 凡　　例

1. 本書中の地図は、「国土地理院 石和2万5千分の1」をもとに加筆した。
2. 本書における試掘坑図の縮尺は各ページに図示する。また、出土遺物の実測図、拓本の縮尺はそれぞれ図示する。

## 目 次

序、例言、凡例、目次、挿図目次、図版目次、表目次	
第1章 調査に至る経緯	5
第1節 調査研究小史	5
第2節 調査に至る経緯	5
第2章 調査の概要	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 試掘坑の設定	7
第4節 基本層序	7
第3章 エリアごとの試掘坑の様相	8
北門想定地付近	8
僧房想定地付近	10
山王神社境内地=石田茂作氏の指摘する講堂	10
報告書の指摘する講堂	13
金堂想定地	14
中門想定地	16
南門、南築地想定地付近	23
東門、東築地想定地付近	25
第4章 主要伽藍における調査成果の検証	28
第1節 金堂	28
第2節 塔	29
第3節 講堂	29
第4節 中門	29
第5節 南門	31
第6節 中軸及び伽藍形式	31



寺本廃寺位置図 (1 / 25000)

## 第1章 調査に至る経緯

### 第1節 調査研究小史

既に春日居町教育委員会刊行の『寺本庵寺 第1次・2次・3次発掘調査報告書』(1988)にて研究小史について述べているため本報告書では簡略に示す。

寺本庵寺は奈良時代川上郡の郡守または、大領(郡衙の長官)もしくは地方豪族の私寺であろうという考え方が昭和13年に大場磐雄によって示された。これは、それまでの国分寺説を明確に否定したもので、国分寺、尼寺の研究成果を基に否定にに関するいくつかの根拠を示している。その後、昭和18年に県史跡調査委員である塙田義道氏による心礎を中心とする一帯の調査が行われ、塙田氏の論文の中で寺本庵寺は最初に造立された甲斐国分寺跡と推定し、笛吹川の氾濫で一宮村国分に再建されたと推定した。その伽藍は川上神社に金堂があり、その北に講堂、その北の道路付近に東西50余間の土壘があるものと推定した。瓦は川田瓦窯で製作されたものとしている。また、川田瓦窯を発見した中嶋正行氏も、寺本庵寺は奈良時代後期に国分寺として造立され、一宮村国分の甲斐国分寺はその後に造建されたものであるという趣旨のこと述べている。

昭和25年になると、石田茂作氏による『甲州寺本庵寺の発掘』が考古学雑誌36巻3号に発表された。そのなかで石田氏は、①寺本庵寺は国分寺ではなく、国分寺の時代(奈良時代中期)よりも少なくとも50年くらい遅い白鳳期に創建された寺跡であろう。②寺域は90間四方で伽藍配置は法起寺式である。③塔は高さ約120尺の五重塔である。との3点を示した。一方で、木下良氏は『国府跡研究の諸問題—甲斐国府跡をめぐって』(文化史学21号 1967)のなかで、国府地域と寺本地域の土地割分布が同一で他地域と異なる点に着目し、寺本庵寺は国分寺建立以前に国府に接した地方官寺が建立されたと想定している。

以上のように、1988年の寺本庵寺の発掘調査報告書以前における諸氏の研究では、まず国分尼寺説が否定され、郡寺、豪族私寺、最初の国分寺、地方官寺などの諸説が示されてきた。

それら諸説を踏まえた上で1980年に調査計画が示され、1981年に山梨県教育委員会文化課の小林広和氏、中山誠二氏を担当者として1次調査が、1982年に同小林広和氏を担当者として2次調査が、1986年から87年にかけて山梨学院大学の十菱俊武氏を担当者として3次調査が実施され、3次調査を担当した十菱氏の編集による調査報告書が刊行された。

寺本庵寺1次、2次、3次発掘調査報告書のなかで、寺域について十菱氏は南門、西門、北門の一部を確認し、幅約6mの築地が四方に巡ることを確認したと記している。さらに築地外郭で東西、南北ともに135mの正方形を呈すと述べている。この想定ラインは南北築地については現在の集落内道路ラインと一致し、東築地ラインは現在の水路と道のラインと一致する。併せて十菱氏は石田茂作氏(1950)の残存する地割を根拠とした90間(163.6m)四方との説よりも方1町(135m)との立場を示している。また、寺本庵寺の伽藍について十菱氏は金堂、塔、講堂、僧房、中門、南門を確認し、回廊、北門、西門、東門の位置もほぼ確認したと記している。さらに伽藍中軸線は寺域中心軸と一致し、方位については「N-5°-E(磁北より) 真北より50° 東に偏している」と記している。十菱氏の示す伽藍配置は塔が東、金堂が西に配置される法起寺式で、塔は三重の塔、金堂は五間×三間、講堂は五間×四間と推定している。これら3つの主要建物は屋根が近接するとも述べている。

### 第2節 調査に至る経緯

平成19年度調査は、寺本庵寺域内での宅地分譲計画が持ち上がったことを契機に実施された。分譲計画地が寺本庵寺南門及び寺院中軸想定ラインにあたっていたため、市は、重要遺跡保護の立場に立ち、試掘調査後に公有地化している。

調査は、1982年に実施した寺本庵寺2次調査で検出した参道耳石付近の再調査と、想定されている中門基壇南側3箇所(南東コーナー、南辺中央付近、南西コーナー)の確認を目的として実施した。

翌20年度には、地域要望に基づき計画されていた山王神社西を南北に通る市道(通学路)拡幅に先立つ試掘調査を実施し、道路拡幅部7箇所に試掘坑を設定した。結果として、山王神社境内において硬化面を捉えた。山王神社は石田茂作氏が指摘する講堂想定地である。塔との位置関係や石田茂作氏の想定伽藍から、硬化面が講堂基壇である可能性を視野に入れつつ、21年度の追加調査を実施することとした。この道路拡幅について、児童の安全な通学の

ために必要な措置であるとの観点から拡幅を認めたが、「①山王神社付近においては下層改良を行わず、路肩も擁壁を打たずに表層に石を並べて地境とする。」「②水路側溝は新たに道路脇に設けず、既存水路に蓋を架け、その外側拡幅部をアスファルト舗装とする。」「③工事の際、文化財課担当の立会いを要す。」等の条件を設け、遺構の保全を行った。尚、当然の事ながら保護層は十分確保されている。

寺本庵寺跡は、平成 21 年 5 月 21 日付、史跡第 29 号として、山梨県史跡の指定を受けた。その後、国史跡を目指すことになるが、平成 21 年 10 月、寺域範囲および伽藍配置における疑問点、不明確な部分を検証することを目的として中心伽藍想定地および寺域想定地外周部を中心に試掘調査を実施した。

この調査は平成 21 年 10 月 1 日から 11 月 13 日にかけて実施し、11 月 19 日に南門跡追加調査試掘坑の埋め戻しを行った。試掘坑の位置は、過去の発掘調査により想定されている伽藍配溝、寺域とともに、北塗地、北門、西門付近塗地、僧房、東門付近、金堂、中門、西塗地、南門、南塗地のそれぞれの想定箇所付近に設定、13箇所において人力での掘削を行った。特に、講堂が金堂、塔に近すぎるとの指摘のことや、平成 20 年度調査で確認した講堂基壇と思われる硬化面の再検証を目的として、山上神社境内に試掘坑を設定した。南門を想定した試掘坑では瓦の集中が認められたため、重機により拡張した。

平成 22 年度調査では、4 月及び 10 月から 2 月にかけて寺本庵寺内の東門想定地周辺、講堂東回廊想定地、金堂想定地、寺域中軸線及び中門想定地周辺の 17 箇所の試掘坑を設置し、遺構確認を行った。調査の結果、金堂が 1 次調査で想定した範囲の東側まで延びていないことが確認された。また、基本層序の再検証の結果、中世以降の大規模な水田造成が寺域全域に及ぶことが確認され、水田造成時に寺本庵寺面の広いエリアを大きく削平していることが確認された。

## 第 2 章 調査の概要

### 第 1 節 地理的環境

山梨県笛吹市は甲府盆地の中央部やや東よりに位置している。笛吹市は、東側に甲州市、西側に甲府市、北側に山梨市、南側に南都留郡富士河口湖町と境を接している。市の総面積は 201.92km<sup>2</sup>である。笛吹市の地理的特徴は、市の名前の由来となっている笛吹川が北東から南西へと流れていることである。その笛吹川には、孤川、浅川、金川、日川などの支流が存在し、日川には大石川、京戸川などの支流が流れ込み、これらの河川により形成された扇状地が市の南東側に広がっている。それに対し市の北西側は、大藏経寺山、兜山、櫛山などの秩父山地の前衛の山々が連なり、これらの山塊から運ばれてきた土砂が笛吹川や平等川の流れにより拡散したことによってできた沖積地である。

寺本庵寺は、笛吹市北部の笛吹市春日居町寺本に位置し、北に兜山、御室山を望み、東から南にかけてやや離れたところを笛吹川が流れる。寺本庵寺は笛吹川支流宮川と鳳山川の間にある微高地にある。寺域東側から南側にかけては、水害の影響を受け、表土下には砂層や礫層の堆積が見られる。一方で、塔心礎以西は寺本庵寺面下層に古墳時代、鬼高期の住居跡が認められ、寺本庵寺以前から洪水の影響を受けない安定した地盤であったことが伺える。

### 第 2 節 歴史的環境

本遺跡が存在する笛吹川右岸は周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く知られている。本遺跡周辺も濃密に遺跡が分布する地域である。

笛吹市東部は縄文時代の遺跡が豊富にあることで有名であるが、本遺跡周辺においてはほとんど見られない。特に笛吹市春日居町内で縄文時代の遺跡は全くといっていいほど確認されていない。

それに対し、山梨県内では珍しい弥生時代の遺跡が寺本庵寺跡北部の下岩下地内で発掘調査されている。平成 11 年度に山梨県埋蔵文化財センターにより調査された横町遺跡がそれである。

大藏経寺山、兜山、櫛山の東向きの斜面には、多くの後期古墳が密集している。孤塚古墳からは、仏具の銅容器、寺の前古墳からは環頭大刀柄頭、平林 2 号墳からは馬具や武具などが出土している。古墳時代の遺跡では、桑戸（後町）遺跡がある。平成 4 年度に県埋蔵文化財センターが調査し、古墳時代中期の住居跡が見つかっている。熊野南遺跡と大呂遺跡は古墳時代の遺跡で、熊野北遺跡は古墳時代後期の遺跡として知られる。飼田遺跡は、昭和 63 年度に旧春日居町教育委員会が、平成 19 年度に笛吹市教育委員会が調査を実施し、古墳時代後期の住居跡を確認している。熊野北遺跡、保雲守橋遺跡、神東町遺跡などは古墳時代から平安時代の遺跡である。

古代甲斐國は山梨、八代、巨麻、都留の四郡から成る。山梨郡の郡域は概ね甲府盆地東部にあたり、荒川以東の甲府市、笛吹市石和町の一部と春日居町、山梨市と甲州市一帯とされており、山梨郡には於曾、能戸、林部、井上、玉井、石糸、表門、山梨、加美、大野の10の郷があつたとされている。寺本地域は山梨郷にあたる。

寺本地域に近い古墳の副葬品には、馬具や銅鏡が見られる。この地域が古墳時代後期には先進的な文化を取り入れた地域であったことが伺える。仏教を受け入れ、それを地域支配に取り入れる下地があり、甲府盆地東部の肥沃な冲積地がもたらす経済力が加わり、寺本庵寺が造営されていったのであろう。

寺本庵寺跡は7世紀末の寺院で、県内最古の寺院跡とされる。また、この地域は山梨郡に属していたと考えられ、郡名の由来となった山梨岡神社が鎮目に鎮座している。寺本古代寺院のすぐ南に国府（こう）遺跡が存在する。その名の通り、甲斐国に最初に置かれた場所、または山梨郡家と推定されている。昭和63年度の調査で礎石建物跡や基壇状の遺構などを検出している。

奈良・平安時代の集落跡は、先述した桑戸遺跡、鶴田遺跡、上町田遺跡、横町遺跡が知られている。他に市道遺跡、中川田遺跡なども平安時代の遺跡である。

春日居町内における中世の遺跡では、信虎誕生屋敷遺跡のような城館跡が確認されている。この遺跡のすぐ南には、柳田遺跡があり、これも中世の土豪の原田氏の屋敷跡と考えられる。『甲斐国志』によると、他に原氏の屋敷も下岩下に存在しているという。徳条地区には小川奥右門屋敷が存在している。

### 第3節 試掘坑の設定

#### 1. 平成19年度調査

平成19年度調査は、昭和57年（1982）調査にて検出したとされる中門基壇基礎と参道耳石についての再検証を目的として実施した。平成20年（2008）2月から4月にかけて4箇所のトレンチを設定、掘削した。

#### 2. 平成20年度調査

寺本庵寺内を南北に縱断する市道拡幅に伴う埋蔵文化財試掘調査であり、寺域想定エリアの中心軸に沿って南北に6箇所の試掘坑を設置、人力による掘削を行い遺構確認を行った。また、山王神社境内において現況にて微高地が見られたため付近の等高線図を10cm間隔で作成し、その状況を確認した。また、地域の高齢者等に対して、震ね70年前の山王神社周辺の風景についてヒヤリング調査を行った。

試掘坑位置については図示するが、北からtr20-1、tr20-2、tr20-3とし、tr20-6を欠番、最終トレンチをtr20-7とした。

#### 3. 平成21年度調査

寺本庵寺内の中心御藍想定位置及びその周辺、想定されている縁辺部を中心に13箇所の試掘坑を設置、人力による掘削を行い遺構確認を行った。尚、tr21-1-2の拡張は重機により行った。山王神社境内において東西方向に硬化面の広がりを確認し、金堂想定地において狭小範囲ではあるがローム層を伴う互層の版築構造を確認した。また、南門想定位置で瓦の集中箇所を確認し、丸瓦の集中、かまぼこ状を呈する瓦の出土状況などを確認した。

#### 4. 平成22年度調査

平成22年度調査は、春期（4月）、秋期（10月から3月）の2期にて寺本庵寺内の東門想定地周辺、講堂東回廊想定地周辺、金堂想定地周辺、寺域中軸線及び中門想定地周辺を中心に17箇所の試掘坑を設置、人力および重機による掘削を行い、遺構確認を行った。東門付近は中世遺構と河川氾濫の影響で寺本庵寺関連の遺構を見出しきれど難しいことが確認された。金堂想定地においての試掘調査で、金堂が1次調査で想定した範囲の東側まで延びていないことが確認され、基本層序の再検証の結果、中世以降の水田床上（Ⅲ層）が守域の広範囲に及び、その際大規模な造成を行っている点、瓦面についてもⅢ層床上面直下に平らに出土する点から水田造成時に床土を破らないよう平坦に均され、多くが原位置を留めていない可能性が高い点が確認された。また、床上面、瓦面下面から古墳時代後期住居跡確認までの間層が10cmから20cm程度しか残らず、Ⅲ層床土造成時に寺本庵寺南の広いエリアを大きく削平していることが確認された。

### 第4節 基本層序

#### 平成19年度の中門想定地調査において基本層序を

1. 表土、耕作土。下部は褐鉄が沈着して明褐色もしくは橙色に近い色調を呈す。
2. 暗灰褐色土層。遺物包含、旧調査（1次から3次）においてはこれも表土と解釈。
3. 灰黃褐色土層。瓦を大量に包含、褐鉄分を含む。時期不明水田床の影響を受ける層。
4. 灰茶褐色土層。遺物包含、参道耳石とされた石列の見られる十層。石列は木屑下部。

ととえ、平成22年度の面的調査を行うなかで、水田床土と瓦面、寺本廃寺遺構面と関係をさらに明確にする作業を行ってきた。その結果、寺本廃寺跡の基本層序を

- I. 現耕作土。果樹栽培導入後の耕作層。
- II. 黄色土。近現代水田に伴う床土。
- III. 暗灰褐色土層、水田床土下層。
- IV. 黄色土。中世から近世水田床上。
- V. 灰茶褐色土層。上層部で瓦片を平面的に包含。茶褐色の縫隙が見える。
- VI. 寺本遺構残存層（礫面、掘込地業、黒色シルト）
- VII. 古墳時代（＝鬼高湖）遺構面
- VIII. 砂礫層

と捉えた。寺本廃寺跡に関する遺構が残る可能性がある層は、山王神社境内地など一部を除いて中世水田面下層から古墳時代遺構面の間にあるV、VI層の範囲となる。

### 第3章 エリアごとの試掘坑の様相

#### （北築地想定地付近）

寺本廃寺第1次・2次・3次発掘調査報告書（以下、1～3次報告書という）によると、北門に関しては、①「南北8mにわたって玉石群が検出され、-80cmでやや硬い黒褐色土層にあたり、玉石がその平坦な上面に一面に出たした。」②「この基壇と考えられる面の北側は軟い暗灰黃砂質土層が80cmの厚さであり、氾濫原と考えられる砂礫層に達していた。」③「この基壇は他の南、西築地の幅5mより広く、その位置が御藍の中軸線上にあることから北門の基壇と判断した。」とある。

また、北築地に関しては④「深さ80cmで玉石が一面にあらわれ、基盤の砂礫層の上になっていた。」、⑤「玉石面前後にローム質の黄褐色土が覆われ、寺本周辺には堆積していないローム土を客土として築地基壇を版築したように判断した。」、⑥「北築地には、幅6mの玉石基壇があり、その外側に幅10m、深さ1mの溝があるらしいこととなる。」、⑦「基壇面からピット2個を検出した。このピットは北築地に伴う掘立柱の痕と思われる。」と述べられている。

この報告からは、北門は「幅8mの玉石群とやや硬い黒褐色土層をもって北門基壇としていて、西、南の築地基壇幅とされる5mよりも広いことと中軸ライン上有ることから北門基壇であると判断した」とが読み取れる。

北築地については、「深さ80cmまで下げるに見られる一面に広がる玉石は基盤となる砂礫層の上にあり、前後にみられるローム質の黄褐色土とあわせて北築地基壇と判断」していることになる。また、基壇面には柱穴が掘り込まれていることから掘立柱の築地壇があったと解釈できる。この記述を検証することを目的として、平成20年度調査において、北築地想定ライン内側に1箇所（tr 20-1）、平成21年度に北築地想定ライン上に2箇所（tr 21-1、tr 21-2）を設定した。

#### 《tr 20-1》

北築地想定ライン上を東西に通る市道より、寺城巾軸線付近を南下する市道の起点にあたる位置であり、築地内側の溝検出の期待がもたらされた。

#### 層序

現地表標高283.8mより45cm下まではI層耕作土とII層水田層、45cmから65cmまではIII層暗褐色シルト質層、65cmから80cmまでの間はIV層にあたる第2水田面があり、標高283mにあたる地表下80cmから110cmまでがV-1層にあたる暗褐色土、110cmから120cmまでは上層よりも暗い色調のV-2層暗褐色土となる。以下、地山砂礫層となる。硬化面は確認されていない。

#### 遺物

瓦や土師器片などの遺物は少ない。標高283.4m付近、IV層黄褐色シルト内での出土が日立つが、そのなかでも瓦の出土量は極端に少ない。

#### 遺構

IV層とV層境付近の283.2mで20cm弱の礫が1点出土されている。単独検出だが、19年度トレンチIV層上面壁と同じ面であり、慎重に判断すべきである。その他、明確な遺構は捉えられていない。

#### 所見

19年度調査で捉えたIV層とV層の関係がこの位置でも捉えられる。V層上面の礫は1点であるが、上下に礫が無いなど、そのあり方に類似点がある。瓦の量などから伽藍空闊地であろう。

### 《tr 21-1》

寺域北辺想定ライン上の北門想定地西に東西1.5m、南北5mの試掘坑を設定した。北築地及び外周溝の検出が期待された試掘坑である。

#### 層序

現地表標高283.75mより35cm下層にあたる283.4mに水田床土層がある。以下砂質層が基調であるが、標高282.9m付近で土師器片が出土する。現地表下約150cmにあたる282.25m付近で幅1.8mの人頭大礫の集中が見られた。礫下層は地山砂礫層となる。硬化面は確認されていない。

#### 遺物

瓦や土師器片などの遺物は少ない。標高282.9m付近の砂質層内の上師器小片の出土が日立つが、瓦の出土量は少ない。土師器は6世紀（古墳IX-X期）と10世紀前半（平安VI期）に比定される。

#### 遺構

地表下1.5mにあたる282.25mで人頭大的礫が幅1.8mの範囲に集中していた。しかし、礫の並び方や重なり具合に統一性を見出すことは出来ず、明確な遺構として捉えるには慎重にならざるを得ない。この面以外で礫の集中等は見られない。また、試掘坑北半分には断面で溝状の落ち込みが見られるが覆土は砂質層が基調であった。その他、明確な遺構は捉えられていない。

#### 所見

捉えた水田床土面については他の試掘坑よりも浅く、瓦もほとんど見られないとから比較的新しい水田面と考えられる。しかし、下層にはIV層と想定される黄色味を帯びた屑が見られない。

床上下面より試掘坑北半分で溝状の落ち込みが確認されたが、その覆土は砂質層が基調となり、よどみに伴う砂溜まりのような個所も見受けられる。瓦の混入はほとんど見られない。溝外部（寺本庵寺側）の断面観察では硬化面、版築面は観察できない。

### 《tr 21-2》

想定されている寺域北辺上の中央付近に東西4.9m、南北1.3mの試掘坑を設定した。北築地または北門基壇の検出が期待された試掘坑である。

#### 層序

現地表標高284.04mより39cm下層にあたる283.65mに水田床土層がある。以下砂質層が基調であるが、標高283.55m付近で11世紀後半の住居跡プランを検出した。標高283.27m付近で礫面となり、礫面中の283.15mで直徑約70cmのピット2基が検出された。礫面までの間で明確な硬化面は確認されていない。

#### 遺物

上層に平安時代住居跡があることから、10世紀後半から11世紀後半に比定される遺物が多い。標高283.27付近の礫面上層には瓦片がやや多く出土する。

#### 遺構

礫面中のピットは直徑約70cm、ほぼ同規模のものが2基検出され、芯芯での距離は2.8mを測る。2つのピットの中間に直徑25cmの小ぶりなピット1基が確認されている。ピット列の方位は真北より東に約80度となり、正方位、地割方位のいずれとも一致しない。東側ピットについては平裁したが、柱痕が見られ、ここに掘立柱があつ

たことが確認できた。確認面からの深さは30cmであった。柱底には礎石、礎板等は確認されていないが、底は漆面であり、柱を安定させるには十分な強度を持つ。

所見

掘立柱跡のような2基のピットについてはほぼ同規模であり、tr-R1で確認された2基のピットとも同規模である。いずれも礎面を抜いている点など共通点が見られるが、方位が一致しない。複数の柱列があった可能性もある。このトレンチ内ピットに関しては上面に11世紀後半の住居跡がある。住居下層には礎と瓦があり込み明確な層序の把握が困難であるため、住居址柱穴の可能性も否定できないが、住居跡内の柱穴にしてはやや径が太い印象を残す。

#### (僧房想定地付近)

山王神社西の一級高い畠からは、僧房跡を確認したと1~3次報告書は記している。1~3次報告書の僧房址に関する部分には、①「上師器細片を多量に含むⅢ層下のIV層はややしまって固く、トレンチ北端より3mの地点で立ち上がり南へ20m続いており、基壇と思われる。」、②「丸石の集合を2箇所確認した。」③「IV層上面より瓦が南北2.5m、東西1.5mの範囲で敷き詰められたように出土した。」④「IV層下部から大量の土師器、須恵器、紺錐車が出土した。」⑤「スヌ、タールの付着した灯明皿が多く、墨書きのあるものも7点出土した。」⑥「柱穴と思われるピットを4本検出した。」との記述がみられる。第Ⅴ章考察編のなかで⑦「東西2間分、南北1間分の根石を確認した。」⑧「西側は瓦堆積が途絶えること、東側は山上神社トレンチまで延びない」の2点を挙げ、⑨「東西2間ないし3間の南北棟を想定し、僧房の存在が考えられるとしている。

#### 《tr 21-4》

山王神社西側、かつて僧房が想定された位置に東西5.7m、南北1.5mの試掘坑を設定した。僧房跡とされた遺構を確認することを目的としたトレンチであるとともに、20年度調査において山王神社境内西端で確認された硬化面の広がりを確認することも目的とした。

層序

現地表約283.8mより83cm下層にあたる282.97mにIV層とした水田床土層がある。以下10cm下層の282.87mにおいてV層が検出されている。また、V層下282.575mで6世紀後半の住居跡プランを確認している。この面をVI層とする。281.87mまでは細かな砂層が続く。尚、第1次調査のtr-G掘削痕を断面で確認した。

遺物

6世紀後半（古墳X期）に比定される土師器片などが見られたが、瓦は比較的少ない。標高282.37mにて同期完形の环が出土した。

遺構

6世紀後半（古墳X期）の住居跡プランをV層直下、282.575mで確認した。同住居跡はサブトレンチ断面にて床面も検出している。

所見

6世紀後半住居址確認面V層以下は寺本庵寺跡地面以前の面である。寺本庵寺面を求めるならばV層またはそれよりも上層ということになる。IV層は水田床上状の黄色味を帯びた層で、その中または直下層から瓦が出土する傾向がある。寺本後の比較的占い段階の水田整地層と捉えるべきであろう。V層については、比較的しまりがある灰茶褐色上層で層の中に茶褐色の縦縞が見える。基壇のように叩き締めた瓦層構造ではないが、寺域内を整地した跡と捉えることもできよう。いずれにしても、黄色味を帯びた庵寺後の水田床上であるIV層、IV層下層から下層に広がる瓦面、瓦面下の茶褐色の縦縞が見える灰茶褐色V層の組み合わせが寺本庵寺面を捉えるキー層となる。

#### (山王神社境内地=石田茂作氏の指摘する講堂)

山王神社境内には、原位置を留めていない礎石が複数見られる。石田茂作氏は、講堂は山王神社境内地にあったと想定している。1~3次調査報告書においても石田茂作氏の想定に基づき、①「法起寺形式に属するのであれば講堂址は山王神社境内付近に想定される。」と指摘したうえで、②「1次調査で神社東側Eトレンチ（トレンチは位置図

で見る限りは神社西側である)を設定し、講堂址の確認を行ったが何ら建物址は検出出来ず、瓦片もほとんど出土しなかった。」と記している。講堂については、3次調査の状況を記すなかで、神社南側の tr-O2 西端で③「直径 1.5 m 程度のまとまりをもつて河原石が検出され、講堂址に伴う根石と推定される。」とし、さらに④「講堂址のものと思われる雨落溝も同時に検出された。」と記している。しかし、一方で⑤「講堂中央より雨落溝が屈曲するのにはいかなる理由によるものかは不明である。」とも記述している。

この雨落溝を根拠とした講堂について、1~3次報告書Ⅷ章考察編では、⑥「石組溝が屈折して南に張り出した部分は塔の北側の雨落溝を延長したものと理解し、伽藍中心線に心を揃えて基壇東西幅を 1.8 m ほど桁行五間の規模と想定しておく。~中略~基壇の南北規模は K トレンチ南辺に沿う石列まで 1.4 m であり、梁行は四間と考えられる。」としている。また、雨落溝が屈曲する理由については、⑦「石組み溝の西半分は後世の石組み溝によって破壊され、石組みが乱れているが、東半分は比較的良好残っており東端の 3 m 余りは南に約 0.3 m 張り出している。」と記述している。

笛吹市教育委員会では、試掘調査を前に、過去の調査写真の検証作業を行っている。そのなかで、山王神社境内試掘坑内全面に広がる礫面写真を確認したが、その密度や石の大きさの統一性から講堂基壇の基礎地盤でないかとの疑いを持った。また、平成 20 年度調査において、山王神社西端で捉えた硬化面を講堂基壇とすべきという考え方も生じつつあった。つまり、山王神社境内は、①礫石が見られ、②法起寺式としては塔との位置関係も良く、③基壇が想定できるような硬化面が広がり、④地業を思わせる礫面があることになる。

#### « tr 20-2 »

山王神社地境より 1.5 m 北の桃畑内に設定。道路拡張範囲に併せて幅約 60 cm、延長約 2 m、深さ 130 cm の範囲を掘削している。途中に硬化面は認められない。瓦の出土も少なく、遺構と判断できるような部分はない。標高 282.7 m 付近にあたる地表下 130 cm 以下は砂礫層の地山層となる。

#### 層序

現地表約 284.2 m より 70 cm までは砂層基層で、耕作による影響を受ける。70 cm から 80 cm に IV 層にあたる水田床土状の黄褐色シルト面があり、標高 283.1 m にあたる地表下 80 cm から 120 cm に V 層があり、地山層である砂礫層へと続く。遺構はみられない。

#### 遺物

遺物は小片のみで量は多くない。IV 層最下層から V 層中に土師器小片が散布しており、標高 283.4 m 付近の V 層下層で比較的大きな坏片がみられた。また、III 層下層 283.1 m 付近に長軸 20 cm の礫が 1 点出土しているが礫の面的な広がりは捉えられていない。

#### 遺構

試掘坑内で遺構は捉えられていない。標高 283.1 m 付近の礫も面的な広がりは捉えられておらず、遺構の一部とする根拠は薄い。

#### 所見

tr 20-2 に関しては IV 層、V 層とともに瓦の出土も少なく、遺構と判断できるものも検出されていない。V 層には土師器小片がみられるがこれらには古墳時代後期のものである。V 層下層は寺本庵寺以前のものであろう。

#### « tr 20-3 »

山王神社境内地西端に南北方向約 8.5 m、幅 30 cm のトレンチを設定した。全面において現地表下 60 cm から 30 cm で硬化面が認められた。

1~3次報告書によると硬化面はかつての試掘においても捉えられている。その延長は約 20 m と記されており (tr J1~J3・報告書 23 ページ、25 ページ)、僧房跡を想定している。tr 20-3 及び報告書に記載された硬化面範囲は微高地となっており、神社東端にもこの微高地が目視できる。考古学雑誌 36巻 3号 (1950年9月 日本国考古学会) のなかで石田茂作氏が示した寺本庵寺実測図中にも神社建物周囲に土塁状に表現されている。

tr 20-3 を含む山王神社境内地に隣接する道路拡幅部分については、道路勾配の変更と境界壁の仕様変更による掘削深度の変更を行い、保護層を確保している。

## 層所

山王神社表上下30cmで硬化面となる。硬化面上面はやや黄色味を帯びた色調で、極めて細かい砂状粒子からなる。スコップの歯が立たないほどに硬くしまっている。遺構保護の観点から硬化面は掘り抜いていない。

## 遺物

現表上下30cmまでは擾乱されており、それ以下の硬化面直上には布目瓦が散布する。比較的大ぶりな破片も見られる。

## 遺構

現地表下30cmにおいて南北に広がる硬化面を確認した。塔との位置関係や神社境内地に残る礎石を根拠に講堂を想定するべきと見える。山王神社境内地には、寺本庵寺1次調査でEトレンチが設定されている。報告書には記述がないが、写真でみると一面礎敷きが施されているように見える。tr20-3で硬化面を抜くと下層にはこのような礎敷きがあると思われ、これが講堂基壇の基礎地業と考えられる。

## 所見

山王神社境内地に講堂を想定すると、塔と軒が近すぎるという疑問が解消でき、境内地内に礎石が多く見られる原因について説明ができる。

塔心礎天端と山王神社本殿下にみられる礎石上面は、ともに海拔284.0mを測り、境内地で確認した硬化面よりも60cm高い。山王神社境内地にはかつて本殿を囲むようにコの字型に土壘状の高まりがあったが、現在は削平され、わずかな高まりを日視できるにすぎない。

塔心礎と山王神社本殿下礎石の高さの関係から、寺本庵寺講堂は、今とそれほど変わらない面に建てられたものと思われる。境内地東側にわずかに土壘状の高まりが残ることから、基壇残存の可能性が期待される。

## &lt;tr21-5&gt;

山王神社本殿裏、かつてtr-N2として調査された付近に東西4m、南北1mの試掘坑を設定した。tr20-3で確認された硬化面の東西方向への広がりを確認することならびにtr-Eにて硬化面を掘り抜いていたかを確認することを目的としたトレンチである。

## 層序

現地表283.32mより32cm下層にあたる283.0mにおいて、硬化面を確認した。また、tr-Eがこの硬化面を掘り抜いていることを断面で確認した。硬化面下層の掘削は、旧トレンチ内の土を一部除去する以外は行っていない。

## 遺物

硬化面上面より、布目瓦が出土する。

## 遺構

硬化面については、平成20年度調査(tr20-3)で南北方向の広がりが捉えられ、21年度調査では東西方向の広がりが捉えられた。

## 所見

山王神社境内地には、掘り出された礎石が置かれ、その中のいくつかは神社内で再利用されている。硬化面の規模と礎石の所在、塔心礎との位置関係から山王神社境内地内に講堂が存在したと判断してよいと思われる。尚、山王神社本殿下の礎石については、天端標高284.0mと、塔心礎の天端標高と一致することから、山王神社境内地(講堂基壇)はそれほど大きく削られていない可能性が高い。

## &lt;tr21-6&gt;

山王神社境内地南端付近に東西0.5m、南北0.9mの試掘坑を設定した。tr20-3、tr21-5で確認された硬化面の南方への広がりを確認することならびにEトレンチ写真で見られる礎面の存在を確認することを目的としたトレンチである。

## 層序

現地表283.37mより50cm下層にあたる282.87mにおいてIV層に相当する水田床土を確認し、同層内

に瓦が出たことを確認した。V層については明確に捉えることはできなかった。尚、IV層下層10cmにあたる282.77mで基礎地業と思われる礫面を確認した。遺構の破壊を避けるため礫面上層で掘削停止としている。

#### 遺物

IV層中より、布目瓦が出土する。

#### 遺構

硬化面については、捉えられていない。IV層下層、現地表より60cm下層にあたる標高282.77mにて基礎地業と思われる礫面を捉えた。礫は拳大よりも大きく人頭大よりも小さいものを用いている。尚、礫は平坦面を上にした石敷き状ではない。

#### 所見

山王神社境内南端においては、西側、本殿北で捉えられたような基壇を思わせるような硬化面は検出されていない。しかしながら、基礎地業を思わせる礫面は捉えられており、主要建物周辺に礫面による基礎地業が施されていることが伺える。尚、この礫面には歩行面を意識したような敷き方は見られない。

### 《tr 22-1》

寺本251番地、講堂想定地である山王神社東側において、講堂東側への回廊取り付き位置の検出を目的として東西約1m、南北約5mの規模で設置したトレンチである。

#### 層序

現地表面標高283.45mから約50cm下層にぶい黄褐色土を基調とした砂礫層となる。

#### 遺物

布目瓦片が耕作土に見られるが総量は多くない。

#### 遺構

硬化面、掘り込み地業等、明らかな回廊の痕跡は認められない。

#### 所見

耕作による搅乱が礫面に及んでおり、明確な回廊の根拠を見出すには至っていない。

### 《tr 22-2》

寺本251番地においてtr 22-1同様、講堂東側への回廊取り付き位置の検出を目的として設置したトレンチである。トレンチ規模は、東西約8m、南北約1.6mである。尚、設置位置から山王神社を挟んだ西側のtr-J2において直径90cmの柱穴列と礫面が検出されており、同様の遺構の検出が期待されたトレンチであった。

#### 層序

現地表面標高283.35mより70cm下層の標高282.65mまでは面的に搅乱されており、以下砂礫層となる。現地表より50cm下層にて一部搅乱を受けていないにぶい黄褐色土が見られた。

#### 遺物

布目瓦、土師器小片などが見られるが、搅乱内の出土であり、原位置を留めるものではない。

#### 遺構

遺構として判断出来るもの認められない。

#### 所見

tr-J2において現状の土地区画に平行するような4本の柱穴列が検出されており、1~3次報告書のなかではtr-J2付近に僧房を想定している。一方で、市教育委員会では近年の検査調査等から山王神社付近に講堂が位置する可能性が高まる中で、tr-J2内の柱穴列を回廊に伴う据立柱遺構の可能性を見出した。そのなかで、tr-J2を設定した土地の南端ラインと、本トレンチを設定した土地の南端ラインが直線上を通過することに着目し、山王神社を挟んで両側に回廊に起因する土地区画が残るのではないかという仮説を立て、試掘調査に臨んだ。しかしながら、著しい搅乱によりtr-J2同様の柱穴列、硬化面等回廊の存在に結びつくような遺構を検出するには至らなかった。

(報告書の指摘する講堂)

## &lt;tr 20-4&gt;

1～3次報告書が想定する講堂に設けた試掘坑である。硬化面は確認されなかった。砂層の互層による堆積があり、現地表下60cmにあたる標高282.6m付近で布目瓦片が重なり合って出土する。瓦片は小ぶりで、数もそれほど多くはないが、10cmから20cmほどの厚みで堆積する。瓦は北側がやや厚く堆積している。地表下約90cmにあたる標高282.4m付近で砂礫層となる。

## 層所

現地表下30cmまでは馴耕作土であり、以下10cmほどの水田床土が見られる。床土面は標高282.9mから283.3m付近に見られる。これはIV層水田面ではなく、その上面に造られた比較的新しい水田(II層)にあたる。以降、褐色砂層となるが、この層は黄褐色土を混入しており、布目瓦片も多く混入する。擾乱を受けたIV層という解釈が適当であろう。IV層下層には瓦が出土する。瓦下層のしまりは強くない。標高282.4mで礫層となる。

## 遺物

瓦出土位置は、標高282.6m付近にあたるが、小片が多く密度は濃くない。瓦は標高282.5m付近から下層には出土しなくなる。

## 遺構

遺構は特に検出されていない。

## 所見

IV層にあたる水田面まで近現代の水田耕作の影響が及んでいるようである。瓦片も小ぶりで密度も濃くはないが、トレンチ北側のほうが南側と比べて出土量が多い。

1～3次報告書による講堂想定根拠は、雨落溝とされる石列であるが、この石列は途中から曲がる。また、未整理写真のなかに東側延長線上の塔心礎北側を東西に走る道路上にて同様の石列写真が残っている。以上の点から報告書の示す石列を講堂雨落溝とするには疑いの余地がある。今回の調査において、このトレンチで、明らかな硬化面は認められないことから、1～3次報告書のように、ここに講堂を想定することは難しい。

## (金堂想定地)

法起寺式伽藍を想定するなかでは、金堂は塔の西側に配置されるべきであり、石田茂作氏も、塔西側、道路がランク状に屈曲する付近に金堂を想定している。過去の試掘調査もその立場に立って実施しており、1～3次報告書に①「塔の西方に設けたC・Dトレンチでは、瓦片が多量に堆積していたことから金堂と推定できる建物の存在が明らかになった。」と記している。また、②「厚さ20cmほどの整地層がある。」と記述したうえで、③「基壇土は整地層の上に築いたものと思われるが、完全に削平されて形跡をとどめない。」としている。一方で、④「瓦散布域の南・北・東を画すように2m程の範囲に帯状に河原石が散乱していた。」と記し、それらの河原石を埠塲外装に用いたものと推測している。さらに、基壇規模を④「南北1.0～1.2mほど(中略)、東西1.8mほどと推測される。」としている。金堂の倒壊状況についても、⑤「瓦の堆積範囲は河原石群で囲まれた内側に特に集中しており、周辺部では河原石に混じって軒瓦が多いことから判断すると、金堂はほぼ直下に倒壊したものと判断される。」と記している。また、1～3次報告書考案編では、東西1.8m、南北1.2m強の基壇では、柱間のバランスが悪い点を指摘している。

## &lt;tr 20-5&gt;

地表下55cmの標高282.6m付近にて暗茶褐色土の小ブロックを含むやや締まった層が認められる。その層の上面より、布目瓦片が出土する。1～3次報告書IV章遺構の金堂址部分にて指摘されている「整地層」がこれにあたるのではないかと思われる。

## 層序

地表面標高283.15mより、20cmから30cmの深さまで耕作による擾乱が及んでいる。以下、褐灰色の砂層が1.5cm程度の厚さで堆積し、その下層にIV層水田床土が1.0～2.0cmの厚さでみられる。このIV上層の標高は282.8mである。IV層下の標高282.6mでV層があり、この層上面付近に瓦が見られる。

## 遺物

布目瓦小片が見られるが量は少ない。

## 遺構

IV層、V層を確認しているが、基壇または基礎地盤の痕跡は認められない。

## 所見

茶褐色ブロックを多量に含むしまりのある層は山王神社以南の各トレンチ内に見られ、その上層には水田床土が見られる。

1～3次報告書では、tr 20-5付近に金堂を想定しているが、tr 20-5にみられるV層は標高282.6mにあり、塔心礎天端標高284mに対して1.4m低く、19年度調査で再確認した中門想定地付近の石面や石列の標高282.2～282.2mに対しては40～60cm高い。現地表での南北傾斜は0.23/30mとほとんどみられない。V層上面においては0.5/25mとなり、本来の南北傾斜は今よりもやや急か、段を持っていた可能性も考えられる。

1～3次報告書では、金堂位置はこの付近であり「基壇土はこの整地層の上に築いたものと思われるが、完全に削平されて形跡をとどめない。」と表現している。塔との関係からみると、ここに金堂を想定した場合、金堂礎石は標高284mよりもやや低い位置にあったものと思われるが、現地表標高283.15mということもあり、礎石は完全に失われ、基壇もほとんど残っていないという判断は正しいと思われる。一方で、金堂がこの付近まで延びるという根拠には乏しい。

## &lt;tr 21-9&gt;

金堂想定地、かつてのtr-D東側に東西1m、南北1.3mの小規模な試掘坑を設定した。尚、当該地は収穫前の野菜畑であり、掘削範囲が狭小となったのはこのためである。

## 層序

現地表283.02mより25cm下層にあたる282.77mにおいて、金堂基壇残存部と思われる版築状硬化面を検出した。硬化面脇の擾乱を除去した際に硬化面の断面観察を行った。硬化面はローム質の黄色土と暗褐色土による互層で、各層の厚さは約3cm～5cmである。尚、遺構保護の観点から、下層調査は行っていない。

## 遺物

版築状硬化面上の耕作上、擾乱内より布目瓦が出土するが、そのほとんどが小片である。掘削範囲が極めて狭小であるため、総量は多くない。擾乱内で検出した瓦の礎石標高は282.5mである。

## 遺構

標高282.77mの版築状硬化面については、tr-Dなどの過去の調査においては報告されていない。互層各層の厚さが3cmから5cmとやや厚い感はあるが、付近に無いローム質の土を用いている点などから基壇の残存部と判断してよいと思われる。

## 所見

版築状硬化面については、確認範囲が狭小である点や、隣接するtr-Cやtr-Dにおいて捉えられていない点から、どの方向にどれくらいの範囲に広がるのかは判断できない。基壇面残存の厚さがどの程度か不明であるが、tr-Dにおいては地表より約1.5m掘り下げていることから、残存状況の悪い基壇面を掘り抜いている可能性が考えられる。

tr-D調査写真(1～3次報告書未掲載)に礎面と礎面に覆いかぶさる瓦層が写っているものがある。この礎面はやや傾斜を持つように写り、この写真位置にあたるtr-D南側に金堂基壇南肩があるのではないかと推察できる。

## &lt;tr 22-3&gt;

1～3次報告書で金堂を想定しているtr-C付近に東西約1.5m、南北約9.5mの規模で設定したトレンチである。

## 層序

現地表283.2mより45cm下層にあたる282.7mにおいて、IV層に相当する水田床土を確認し、その下層に若干の瓦が見られた。IV層水田床下層は黒褐色土でしまり、粘性ともにみられる。この層の上層には布目瓦片がみられるが、中層以下では土師器片が見られ、それらのほとんどは古墳時代後期に比定される。標高282.2m付近

まで掘り下げるに古墳時代後期の土器を含む住居跡プランが明瞭に描ける面となる。

#### 遺物

布目瓦はIV層水田層とV層（水田層直下層）上部にみられ、V層中層以下では6世紀後半から7世紀前半（古墳X-XI期）土師鍋片が多くなる。トレンチ南端で布目瓦集中部が見られたが、その部分においてはIV層水田面が不明瞭となっており、水田造成後の上層からの掘り込み施業であると判断出来る。

#### 遺構

標高282.2mで古墳時代後期の住居跡プランが明瞭となる。

#### 所見

t r 22-3においては、金堂に伴う版築、掘り込み地業というような明らかな根拠を見出すことはできなかった。1~3次報告書の示すようなt r-C付近まで延びるような長方形の金堂ではなく、t r 21-9付近でおさまる正方形に近い平面プランの建物または、全体が四に寄る位置にあったのではないかと想定できよう。

#### «t r 22-6»

t r-Dにおいて確認されている2m幅範囲にみられる帯状の河原石の再検出と基壇残存部の再確認、基礎地盤の有無の確認を目的として設定したトレンチである。尚、栽培中の野菜を避ける位置での試掘坑設定であったため、旧試掘坑内でのトレンチ設定となった。

#### 層序

現地表標高283mから帯状に並ぶ河原石確認面282.2mまでの間は、t r-Dにより完全に掘り返されており、残存土層は無い。この河原石面は、t r 21-9で確認した版築層よりも57cm低い。

河原石確認面から70センチ掘り下げ、標高281.5mまでの間までの土層を観察したが、その間は比較的しまりのある層で構成され、黒色上ブロックを含む水平堆積がみられた。尚、標高281.4mできめ細かな砂層（地山層）となる。

#### 遺物

帯状河原石面までは旧トレンチによる搅乱のため、原位置を留める遺物は認められない。また、川原石面下層サブトレンチ内において遺物は認められない。

#### 遺構

帯状河原石北側については旧トレンチにて掘り抜かれているが、t r 21-9において基壇版築が認められ、下層に掘り込み地業跡と想定されるブロックを含む帯状堆積が認められるため、本来は金堂基壇範囲内であったと思われる。

#### 所見

t r 22-6において再確認された川原石は、明らかな石敷きといえるような平坦面を以って並べてはいないが、塔心礎天端標高よりも1.8m低い位置にある。また、t r 21-9で確認された版築層よりも57cm低い位置にある。一方で、t r-Dを埋め戻した土を見ると、その色調はにぶい褐色（7.5 YR 5/4）を示し、その構成土のなかには黄色ブロックを多く含む。他の埋め戻しトレンチの土層（10 YR 3/2など）と比較して明らかに黄色味を帯びたものとなっている。

#### （中門想定地付近）

1~3次報告書では、南門想定地と中門想定地を南北に結ぶラインに試掘坑を設定し、北に中門基壇基礎、南に南門基壇基礎、その間に参道玉石を確認したと述べている。中門確認の根拠について1~3次報告書は、①トレンチ北端から4.1mの範囲がトレンチ中央部よりも約30cm高い。②玉石がやや密に見られる。③トレンチ西際で礎石据えつけ用の根石を1箇所確認した。④先に検出した金堂址、塔址との位置関係からみて中門とした。との4つの点を根拠に挙げている。さらに、検出した根石について、上石（直径1.0~2.0cm）を直径0.5mの範囲に配置したもので、根石の南1.95mの位置に不ぞろいながら東西に連なる玉石があるとしている。この東西に連なる玉石ラインをもって中門基壇南端と想定している。また、1~3次報告書では、「基壇の築成は掘り込み地業を行わず、旧地表を平坦に整えて築きあげているが玉石が密に見られるように築成に際しては基壇を強固に築き上げるために大小の玉石を

多量に入れ込んでいる」としている。さらに、「基壇内で版築の痕跡は認めるることはできない」と結んでいる。また、1～3次報告書Ⅳ章考察編には、さらに踏み込んで⑦「正面基壇の出が約2mと判明した。」⑧「検出した根石は中門参道の西側耳石から西5尺に位置すること、参道幅は石敷の広がりから少なくとも5尺はあったことから、中門中央間は少なくとも1.5尺と考えられる。両脇間を1.0尺、梁行も南門と同様1.0尺等間として桁行三間、梁行二間の門と想定すると甲賀守中門と同規模となる。」と記している。

笛吹市教育委員会では、平成19年度調査から22年度にかけて中門遺構検証のための試掘調査を実施した。特に22年度調査では、中門想定地付近において9m×1.2m規模の面的調査を実施した。

#### 《tr19-1》

検出されたとされる参道耳石(片側)のもう一方の耳石の検出と、耳石に埋まれた参道範囲の構造を確認することを目的として、想定中軸線(参道)に直交する形で幅2.0m、延長7.0mで設定した。このトレーンチは、昭和15年半トレンチ2.0m×3.0mを含んでおり、その東西それぞれを2m延長したかたちになる。表土除去後、土層ごと遺物の出土状況を記録しながら耳石とされた石列上面と同一の標高で遺構確認を行なった。遺構範囲が明らかでないことから、トレーンチの南側にサブトレーンチを設定し、石列検出面より下層についても確認調査を行った。

#### 層序

現地表面標高2.82.9mから深さ7.0cmから9.0cmの位置にIV層水田床と上層がある。水田層下層に櫛面があり、その下層で住居跡を検出している。住居跡床面は現地表から1.80cm下で捉えられている。

#### 遺物

位置を記録した遺物については、Ⅲ層16点、IV層923点、V層以下で509点である。IV層における出土が際立っているがその多くは瓦片であり、上師器片、灯明皿が混入する。V層以下においては上師器片の割合が多くなる。また、炭化物粒が見られるようになる。

#### 遺構

IV層下面において耳石とされた石列、上石群を再度検出している。石列は現地表面から9.0cmの深さ、標高2.82.0mで検出されており、東に広がる玉石群上面よりも1.0cm程度高いことが確認された。また、石列は一部で2段構造となる。下段の石は上石群上面レベルとほぼ合う。耳石とされた石列の反対側の石列はこのトレーンチでは確認できない。また、石列下層からも瓦は若干出土する。

耳石とされた石列下層においては、ピット状遺構2箇所を検出している。1号ピット状遺構は砂層から掘り込まれ、2号ピット状遺構はカマド袖石転用と思われる礎石を持つ。4号遺構は住居跡と思われる。4号遺構については出土遺物から寺本庵寺以前、古墳時代後期の遺構と考えられる。V層以下で出土する上師器片の多くはこの遺構に由来すると思われる。

#### 所見

1～3次報告書で参道耳石と想定されている石列は長軸2.0cmから2.5cm、短軸1.0cmから2.0cm程度の櫛を用いているが、南門想定地に近い側では中軸線方向に石の長軸を用いて並べ、中門想定地に近い側では中軸線に直行する方向に石の長軸を用いて並べている。この石列や石敷き面の下層において硬面は確認されていない。

#### 《tr19-2》

tr19-2～4は中門基壇部分の範囲を把握するためにいずれも2.0×3.0m(tr19-4は旧調査部分)の範囲で設定した。

tr19-2は中門基壇の南東コーナー部が推定されている位置である。調査方法はtr19-1に準拠しており、IV層上面で遺構確認を行なった。さらに、北側と東側にサブトレーンチを設定し掘削を行ない、下層の調査を行なった。

#### 層序

I～II層は現地表面標高2.82.95mから深さ4.0cmの範囲、III層は4.0cmから5.0cmの範囲、IV層水田面は5.0cmから7.5cmの範囲、以降V層が7.5cmから1.35cmの範囲になり、その下層が砂層であり、地山層と捉えた。

tr19-1同様に遺構確認面はV層上面とし、サブトレーンチにて一部で下層確認を行っている。

V層とV層の境はtr19-1よりも約2.0cm高い標高2.82.2m付近である。

## 遺物

t r 1 9 - 1 同様、IV層には瓦片が多い。V層中では、IV層から10cm範囲の浅いところで瓦片の割合が多いが、V層の深い部分においては土師器片が多くみられる。土師器片は古墳時代後期の住居跡に由来するものである。一方で、IV層から約2.5cm下層まで数少ないが瓦が出土する。

## 遺構

V層上面（確認面）については、長軸2.0～3.0cmの礫が数点検出されたのみで遺構として捉えるべきものはない。V層上面より10cmから30cm下層にあたる標高2.82m付近でV層（砂層=地山層）に掘り込む6号遺構（住居跡）を検出した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と判断できる。

## 所見

IV層、V層についてはt r 1 9 - 1においても検出されている。IV層を中近世の水田床土と捉えると、V層中で確認できる古墳時代後期の住居跡を根拠に寺本廃寺面はV層上面以上ということになろう。その点では、t r 1 9 - 1の石列を寺本廃寺参道耳石としても良い。

そのような立場から、1～3次報告書では、t r 1 9 - 1のV層上面で再検出した石列を参道耳石と捉え、さらにその北側にあたるt r 1 9 - 2～4以北について礫石据え付け用の根石の検出や玉石がやや密になる点を根拠として「中門基壇であることが明らかになった」と記している。中門基壇の東西範囲については推定域として示している。

## « t r 1 9 - 3 »

t r 1 9 - 3は中門基壇の南西コーナー部が推定されている位置である。調査方法はt r 1 9 - 1に準拠しており、IV層上面で遺構確認を行なう。さらに、サブトレンチによる下層調査を行なった。

## 層序

現地表面標高2.83.0mから深さ4.0cmの範囲が現耕作土、III層は4.0cmから6.0cmの範囲、IV層水田床土は6.0cmから8.0cmの範囲、V層は8.0cmから12.0cmの範囲、12.0cmから15.0cmまでが黒褐色シルト質層となり、以下砂層となる。尚、V層上面付近に黒褐色シルト質砂層が1.0cmの厚さで見られる。t r 1 9 - 1同様に遺構確認面はV層上面とし、サブトレンチにて一部で下層確認を行っている。IV層とV層の境はt r 1 9 - 1よりも約2.0cm高い標高2.82.2m付近である。

## 遺物

t r 1 9 - 1同様、IV層には瓦片が多い。V層中では瓦片の割合が減り、土師器片が多く見られる。IV層に見られる土師器片は10世紀以降のものが目立ち、V層中の土師器は古墳時代後期のものが目立つ。

## 遺構

V層上面（確認面）に長軸4.0～5.0cmの礫が散在している。礫面は厚さ1.0cm程度の黒褐色シルト質砂層内にあり、この層のしまりはやや弱い。炭化物や赤色粒子を僅かに含む。礫面はこの面のみで、垂直方向に2.5cm程度の幅のなかで礫同士が不規則に重なる関係にある。礫のレベルは標高2.82.2m付近である。礫面層および礫面下層のしまりはやや強く、付き固めて配置した礫とはいえない。報告書では中門基壇を想定しているが、基壇や基礎地盤を示すような版築状の土層は見えない。少なくとも下層7.0cmまでの範囲で礫面が見られないことから、人為的にこの位置に運んできた礫の可能性が高い。

## 所見

中門基壇南西コーナーを想定して設定したトレンチであるが、基壇や掘込み地盤として捉えられるような明確な硬化面・版築構造は確認されなかった。しかしながらV層上面において不揃いながらも礫面が確認されている。礫面はt r 1 9 - 1内石列やt r 1 9 - 2内に見られた礫と同様にV層上面にあるが、t r 1 9 - 3においては礫面と併せて黒褐色シルト質砂層が検出されている。

t r 1 9 - 2、t r 1 9 - 3共に、V層下に掘込み地盤や基壇と考えられる明確な硬化面や版築は認められない。そこで、V層よりも上層に目を向けることとする。IV層は明黄褐色土で上質としてはシルト質である。しまりや粘性がややあり、砂や暗褐色シルトをブロック状に含むことから水田床土と判断してきた。明黄褐色シルトが厚さ1.0cm、その下に暗灰黄色砂質シルトが1.0cmの厚さで見られ、その下の5～10cm程度の灰黄褐色シルト質砂層を経て礫面を含む黒褐色シルトへと続く。暗灰黄色砂質シルト、灰黄褐色シルト質砂層には明黄褐色土層の影響が及んでい

るようで明黄褐色土ブロックが入り込む。IV層を水田床上と捉えるならば、V層直上までは少なくとも水田造りの影響を受けているものと考えられる。よって、V層上面で捉えた石列、礫面についても、水田造成の影響を受けている可能性が高い。IV層内に止まらず、V層内上層まで瓦が出土する理由として水田造成の影響を挙げてもよいと思われる。

#### 《tr 19-4》

tr 19-4は旧調査部分を改めて掘削したトレントである。tr 19-2及びtr 19-3において、基壇が把握できぬいため、旧トレント基壇とされた部分の土層把握を行うこととした。埋め戻しを除去後、V層上面にて遺構確認後、東側にサブトレントを設定し掘削を行った。

#### 層序

現地表面標高282.9mから深さ3.5cmの範囲が現耕作上、Ⅲ層は3.5cmから5.5cmの範囲、IV層は5.5cmから7.0cmの範囲、V層は7.0cmから11.5cmの範囲、11.5cmから14.0cmまでがシルト質層となり、以下砂層となる。尚、V層上面付近と下層近くにそれぞれ黒褐色シルト質砂層が約1.0cmの厚さで見られる。tr 19-1同様に遺構確認面はV層上面とし、サブトレントにて一部で下層確認を行っている。IV層とV層の境はtr 19-1よりも約2.0cm高い標高282.2m付近である。礫面は標高約281.9mから282.3mの範囲で多少の垂直方向での重なりをもつている。

#### 遺物

V層までは旧トレントで失われているため、V層中での遺物出土状況となる。土師器片が多く見られ、時期が判別できるものでは古墳時代後期のものが目立つ。尚、サブトレント内で標高281.6m付近においても僅かではあるが瓦が出土する。

#### 遺構

V層中でピット状遺構のプランが見られる。ピットは陥没で直径約6.0cm、確認面からの深さ6.5cmを測り、柱痕跡が見られる。柱痕はピット底部を抜いており、完掘していない。柱痕跡の直径は約1.3cmである。ピット状遺構は幅約9.5cm、深さ4.5cmの溝状遺構で切られている。柱痕が溝状遺構に統かないことからピット状遺構よりも新しい溝状遺構が重複していることが確認された。溝状遺構は1~3次報告書の示す寺本庵寺中軸想定ラインより約10.0度南に振れている。出土遺物は古墳時代後期の土師器小片で、2点の瓦片が出土している。いずれの遺構も、寺本庵寺面とされるV層上面での掘り込みは確認できないため、大規模な修築を考えなければ寺本庵寺以前の遺構と考えられる。

#### 所見

V層上面にみられる黒褐色シルト層は、標高282m付近に分布しており、礫面と一致することからtr 19-3でみられた黒褐色シルト層と同一層であると考えられる。中門想定地において、礫面は黒褐色シルト層に分布していくことになる。礫は面的に広がるが、垂直方向にあまり薄く、礫面下層にあたる暗灰黄色シルト質砂層においても基壇や塗込み地盤を想定できるような版築等の硬面化は見受けられない。また、礫面標高である282m付近は寺本庵寺塔心礎上面の標高である284.0mに対してほぼ2m下がることになる。現地表での傾斜は0.23/3.0mとほとんどみられないが、IV層においてどのような造成（厚さや傾斜補正）を行っているかを見極める必要がある。

ピット状遺構については柱痕が地山砂層まで入り込んでいる様子が観察できている。地山砂層下は礫層になると思われるが、狭小サブトレント内での確認のため、柱痕が礫層まで達しているかは確認できていない。ピットに伴う遺物が無いため時期判定は難しいが、断面観察からこの段階で想定されている寺本庵寺面以前のものであることは間違いない。一方で、溝状遺構についてはピット状遺構を切っていることが断面観察から判断でき、V層上面で掘り込みが確認できないことからやはり寺本庵寺面以前の遺構ということができよう。古い順に示すならば、①ピット状遺構→②溝状遺構→③寺本庵寺となる。

#### 《tr 20-7》

中門想定地の西側に設定した。回廊の痕跡が認められることを想定したトレントである。現地表は標高283.1mで、横を水路が流れている。

## 層序

現地表下30cmまでは耕作および境界石埋設のための擾乱が見られる。以下、1.5cm程の厚さの灰褐色砂層がみられ、現地表下50cmにあたる282.6m付近から282.2mの間、約30cmの厚さで黒褐色土が堆積する。黒褐色土下の標高282.3m付近から橙色のしまりのある層が見られる。標高から判断してこれがIV層に対応するものと思われる。以下は隣接する水路よりも低くなり、水が流入してくるため掘削を行っていない。ここまで掘削すると、水路の影響か、砂礫が見られる。

## 遺物

地表下60cmにあたる282.5m付近から282.2mの範囲に瓦が出上するが密集というほどではない。遺物はIV層と上層の黒褐色土との境付近からの出土が目立つ。

## 遺構

遺構は捉えられていない。

## 所見

水路の影響か、IV層に相当する橙色層の下層に礫が見られる。また、IV層上層の黒褐色土層も水路の影響を受けていると思われる。試掘調査では、IV層を概ね振り抜き、V層上面で止めているが、柱穴等のプランは捉えられていない。他のV層と比較して砂利や砂が混入するが、これは水路の影響といえよう。

## &lt;tr 21-10&gt;

中門想定地とされたかつてのtr-H北側に東西1.5m、南北2.9mの試掘坑を設定した。中門に側しては石面の広がりをもって根拠としているが、同様の礫面の広がりや硬化面など新たな根拠となる遺構の検出が期待された試掘坑である。

## 層序

現地表283.42mより40cm下層にあたる283.02mにおいて、IV層に相当する水田床土を検出し、282.82mにおいてV層にあたる面を確認した。また、282.02mにて、礫層を確認した。瓦はV層中の282.72m付近に多く見られる。尚、282.27mにて焼土が見られる。

## 遺物

布目瓦はほとんどが小片で、総量は多くない。瓦はV層上層の282.72m付近に多く見られる。

## 遺構

明らかな遺構は認められないが、標高282.82mにおいてV層面が広がり、282.27mで焼土が見られる。また、282.02mで礫面が広がる。焼土面において住居等のプランは明らかに出来ない。礫面についても地山か礫敷きかの判別は難しい。

## 所見

中門の位置を確定できる成果は得られていないが、水田床土下層にV層寺本面という基本的な層序を見ることは出来る。焼土については寺本以前の住居等の遺構を想定することが自然であろう。その想定のもとでは、最下層に見られる礫面は寺本に関する基礎地業ではなく、地山礫面ということになろう。

## &lt;tr 22-4-1&gt;

中門想定地とされたかつてのtr-H北西側に東西2m、南北9mの試掘坑を設定した。中門から西側に延びる回廊位置を確認することを目的とした試掘坑である。

## 層序

現地表283.2mより85cm下層にあたる282.35mにおいて、高密度に密集する礫面を確認した。礫面の厚さは4.5cmある。尚、礫面上層は水田床上面で床上面に乱れはみられない。礫面下層は砂礫層と同化し、人工物か自然堆積かの判別が難しい。

## 遺物

布目瓦はほとんどが小片で、総量は多くない。瓦は礫密集面上層の水田床土に入り込んだ状況で検出される。そのなかには2片の単弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土している。これは1~3次報告書分類の軒丸瓦IIaタイプにあたる。

礫密集層上層、水田床土内一括遺物のなかに「禪院」と記された8世紀前半（奈良平安二期）に比定される墨書き土器底部が出土している。

#### 遺構

水田面に掘り込みが無い点から、礫密集部は水田面造成前のものと判断できるが下層砂礫面と明確な区別が見出せない。

#### 所見

礫密集部、「禪院」墨書きの出土など興味深い試掘坑である。禪院は奈良時代史料にみられる仏教施設であるが、その創設者で7世紀後半に活躍した道昭の「禪院」と今回出土した「禪院」墨書き土器の間にどういう位置関係が想定できるのかについては別に記す。

この試掘坑位置は金堂想定地の南東、中門想定地北西に位置する。寺本廃寺回廊があるならば回廊内側の伽藍中心地付近ということになる。一方で、この上器は中世以降の水田造成時の擾乱により原位置を留めてはいない。よって、寺本廃寺に禪院と呼ばれる一角があったにしてもその位置を特定することは困難である。

#### 《tr 22-4-2》

中門想定地とされたかつてのtr-H西側に東西3m、南北8mの試掘坑を設定した。中門から西側に延びる回廊位置を確認することを目的とした試掘坑である。

#### 層序

現地表283mより50cm下層にあたる282.5mにおいて、IV層に相当する水田床上層が見られる。IV層下にはV層がみられ、さらにその下層には黒褐色シルト質層の堆積もみられる。

#### 遺物

布目瓦はほとんどが小片で、総量は多くない。IV層とV層間に集中する。IV層上層付近よりかわらけが出土する。

#### 遺構

IV層水田床土を掘り込み配置されている石列がある。かわらけを伴う点から中世遺構と判断したい。V層下層においては、黒褐色シルト質層と暗褐色土の互層が見られるが、明確な硬化面とは言えず、回廊の基礎地業としての版築構造とは断言し難い。

#### 所見

IV層に掘り込む石列にかわらけが伴う点、寺域想定地東端付近にひろがる中世遺物などから、IV層水田造成時期は中世、概ね15世紀～16世紀頃と思われる。3次調査においてみられた塔心礎北側道路下の石列と併せて中世の水路遺構または地盤石垣遺構ではないかと判断したい。

また、V層下層の黒褐色シルト質層については、後述するtr 22-5-3においても認められる。しかしながらいずれも明確な硬化面を伴わない。想定される遺構が回廊であり、寺院においては比較的重量が架からない構造である点からも、基礎地業跡と判断しきれないものである。

#### 《tr 22-4-3》

中門想定地北西側に東西3m、南北1.5mの規模で掘削した。tr 22-4-1において礫集中部が確認されたことを受け、礫面の広がりを確認することを目的として追加掘削した試掘坑である。

#### 層序

現地表283.15mより60cm下層にあたる282.55mにおいて、IV層に相当する水田床土層が見られる。IV層下にはtr 22-4-1でみられた礫集中面がみられ、その下層は砂礫層となる。

#### 遺物

布目瓦はほとんどが小片で、総量は少ない。礫集中部南限の外で6世紀末から7世紀初頭（古墳X～XI期）に比定される壺が出土している。

#### 遺構

tr 22-4-1で捉えた礫集中部の南限を捉えた。tr 22-4-1同様砂礫層に続き、境目は判断し難い。tr 22-4-1とtr 22-4-3の確認状況からみると、礫集中部南西コーナーは約60度と鋭角を呈することに

なる。

礫集中部南側の砂質上面より、6世紀末から7世紀初頃に比定される壺がほぼ完形で出土しているが、これに伴う住居跡プランは明確に見出せていない。

所見

t r 2 2 - 4 - 1、t r 2 2 - 4 - 3から、礫密集部南北コーナーが鋭角を呈することが確認された。いずれも礫は砂礫層に続き、その境目は明確に出来ない。礫集中部南限ラインは明確に切れる。古墳時代後期の完型壺の存在から、礫密集部は古墳時代以前の河川氾濫により密集した礫が古墳時代住居に切られた残存部分とみることが自然であろうか。

#### ＜t r 2 2 - 4 - 4＞

中門想定地北側に東西1.3m、南北4.5mの規模で掘削した。t r 2 2 - 4 - 1において礫集中部が確認されたことを受け、礫面の広がりを確認することを目的として追加掘削した試掘坑である。

層序

現地表283.1mより55cm下層にあたる282.55mにおいて、IV層に相当する水田床土層が見られる。V層下は282.45mで捉えられる。

遺物

布目瓦はほとんどが小片で、総量は少ない。古墳時代後期に比定される土師器片が少々出土した。

遺構

t r 2 2 - 4 - 1で捉えた礫密集部は認められない。地表下80cmにあたる282.3mにて古墳時代後期の住居跡プランの一部を検出している。

所見

t r 2 2 - 4 - 1で捉えた礫密集部は本試掘坑まで及んでいない。

#### ＜t r 2 2 - 5 - 1＞

中門想定地上やや西よりの位置、t r 1 9 - 3に重なる位置に東西2.5m、南北9mの規模で設定した試掘坑である。

層序

現地表283mより55cm下層にあたる282.45mにおいて、IV層に相当する水田床土層が見られる。また、現地表下70cmにあたる282.3mで礫の広がる面を捉えられる。礫面下層には暗褐色上、黒褐色シルト質土による互層構造も見られるが、明確な硬化面は認められない。

遺物

布目瓦は小片で、IV層下層で平面的に出土する。瓦層下層に礫面がひろがる。礫面下層には瓦はほとんど出土しない。遺構

IV層下層、282.3m付近に礫面が広がる。試掘坑中央付近ではやや大ぶりな礫が見られ、試掘坑南側においては小ぶりな礫がみられ、南側に向かってやや下り傾斜を持つ。

所見

礫集中部をもって中門を想定しているが、その根拠となる礫面を再度捉えることが出来た。この礫面は直上まで中世以降の水田造成によって削平されており、基壇等の構造物を見出すことは出来なかった。一方で、礫面下層には黒褐色シルト質層が帯状にみられ、約80cm下層にみられる地山砂礫層までの間に礫面をみると出来ない。東に隣接するt r 2 2 - 5 - 3においては、参道耳石と想定される2列の石列と礫面の広がり、礫面下の互層構造などを捉えており、ここに礫面を基礎地業として用いた中門遺構を想定してよいと思われる。

#### ＜t r 2 2 - 5 - 3＞

中門想定地上に東西9m、南北9mの規模で設定した試掘坑である。中門の根拠とされる礫面の検出、基礎地業などの痕跡を見出すことを目的とした試掘坑である。t r - H、t r 1 9 - 1、t r 1 9 - 4と重なる位置に設定している。

## 層序

現地表 283 m より 55 cm 下層にあたる 282.45 m において、IV 層に相当する水田床土層が見られる。IV 層直下、282.2 m 付近には礫面が広がる。礫面が乗る上層はやや黒味をおび、下層には厚さ 20 cm 弱のしまりのある暗褐色土があり、その下層に厚さ 2 ~ 3 cm 程度の黒褐色シルト質層が見られる。礫面から地山砂礫層までの間、別の礫面を見出すことは出来ない。

## 遺物

瓦は IV 層水田床土層とその直下の礫面上に集中する。いずれも小片であり平面的な分布である。平瓦や丸瓦は、凸面に縄目タタキを施した後にナデ調整を行っているものがほとんどで、凹面には布目が残るものまたは布目的一部分をナデしている。丸瓦のほとんどが行基式であるが、玉縁式とみられる丸瓦が 2 点出土している。出土する層は、IV 層水田床土の下層で標高 282.1 m から 282.3 m の範囲に集中する。軒丸瓦、軒平瓦はほとんど認められないが、外区に珠文を持つ複介蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が認められる。IV 層水田床土から礫面上層の間にみられる土師器は、9 世紀から 11 世紀のものが入り混じる。中には 8 世紀後半の土器片も見られる。これらの土器片の出土標高をみると、礫面直上にあたる 282.1 m 付近で 9 世紀後半から 10 世紀初頭に比定されるものが多く、IV 層水田床土に近い標高 282.2 ~ 2.5 m 付近に 11 世紀に比定されるものなどがみられ、その年代幅が広がる。これは、水田造成に伴う搅乱に起因するものと考えられる。

礫面下層においても瓦は若干出土するもののその量は極めて少ない。瓦に代わり、古墳時代後期に比定される土師器片がほとんどとなる。

t r 22-5-3 西側、t r 22-5-1 との境をなすセクションベルト周辺において、IV 層水田床上層を掘りぬいて瓦を廃棄している箇所が確認できた。

## 遺構

既に報告されている参道耳石とされる石列西側において平行する石列を確認した。石列間は外一外で 3 m、内一内で約 2.7 m を測る。この石列の方位は、正方位に対して 2 度 20 分東に偏している。石列の石は 20 ~ 25 cm 程度のものが多く、北側で小口に用い、南側では横口に用いて並べている。小口部分には 2 段の石積が残る。石列の確認標高は 282 m であり、塔心礎天端より 2 m 低い。

礫面の密度は全体的に薄いが、西側が比較的濃く東側が薄い。東側耳石とされる石列の北側から東に向かい帯状に礫がよく残る。その付近から北側の礫面は約 10 cm 高くなる。また、所々に直径 80 cm 程度の礫密集箇所が見られるが、その配置に規則性を見出しづら、礫石の根柢とは言い切れない。

## 所見

参道とされていた石列の西 3 m (外一外) で、平行する石列が確認されたことで、参道の可能性がより高まつたといえよう。1 ~ 3 次報告書では対応する石列を東側に想定して伽藍配置を想定していたため、寺本庵寺の中軸線は報告書のものよりも約 3 m 西に移る可能性が高くなつた。このことは、t r 19-2 の礫面出土状況が t r 19-3 と比較して極端に薄いことからも裏付けられよう。

南北方向については、t r 21-1 ~ 10 など、本試掘坑から地境を挟んだ北側で礫面構造が認められない点などから、1 ~ 3 次報告書で想定された程は北に延びない可能性が高い。

この試掘坑を含めて伽藍想定地のかなり広範囲を水田による削平造成が行われていることが再認識された。瓦も、水田造成の際に平らに均され、床土の下にパックされたと考えられる。また、参道耳石とされる石列直上まで水田による削平造成が行われていることから、中門基壇はほとんど削平されてしまった可能性が高い。また、石列に挟まれた範囲に明確な硬化面が認められないことから、参道も上面は削平されている可能性がある。

一方で、礫面下層に瓦層構造が見られることから、基礎地業を行っているものと思われる。基礎地業下限は、礫面から約 20 cm 下層の古墳時代後期の遺構が断面観察できるまでの間に施されているものと考えられる。塔心礎天端標高 284.00 m に対して、礫面の標高が約 282.10 m、参道耳石とされる石列の標高が 282.00 m であることから、調査で捉えた礫面も基礎地業面内であると考えるのが自然であろう。

## (南門、南築地想定地付近)

1 ~ 3 次報告書 IV 京造構の南門は、①「H トレント南端部近くでは、Ⅲ層（木報告書の IV 層に相当）直下でおびた

だしい量の瓦が散乱している状況を検出した。」との記述からはじまり、②「瓦片をとりあげて、南北約5mにわたる範囲で広がる玉石群を検出した。」と続く。さらに、③「玉石群の北端すなわち中門基壇南端から南へ11.1mの位置では、橢円形の大石を据えて玉石群を区切っている。これらの玉石群の上面には、根石として据えた石を検出することができなかったが、中門基壇基礎と同様な状況で玉石が集積されていること、瓦片が大量に見られることなどから、南門基壇の基礎地盤と考えることができるのである。」と記述している。また、この玉石群の広がりは、道路を挟んだ南側にも統一しており、それを受けて④「基壇の南北幅を10mに復元できる。」と結んでいる。また、調査全体をまとめた『昭和20年考古学編』の御監配鑑、中門・南門の部分では、⑤「南門は栗石敷の範囲から基壇南北幅が約10mと判明した。」と明記し、⑥「基壇の出を中門と同様に7尺とすると梁行2間で10尺等間と理解できる。桁行も10尺等間とし、桁行3間、梁行2間の門と想定しておく。」と結んでいる。

一方で、同章南遺構の部分において、南門基壇より7m南で確認された⑥「礎石及び根石と考えられる遺構」の存在を記しており、この「遺構」の性格および機能については特に触れられていない。道路を挟む部分で南門基壇を想定しているため、1~3次報告書はこの遺構を南門、南壇地の外の遺構と捉えていることになる。

南門については、おびただしい量の瓦と玉石群、根石を根拠に、位置および規模が想定されている。この南門についても、基壇の版築を捉えたとの記述は認められない。

#### 《tr 21-1-1》

寺域想定地南西部、かつてのtr W-3南に東西3.3m、南北1.4mの試掘坑を設定した。

##### 層序

現地表282.71mより95cm下層にあたる281.76mにおいて、IV層に相当する水田床土を検出、その下層にあたる281.61mにおいて暗褐色土となる。また、281.46mで砂礫層となる。

##### 遺物

布目瓦は小片が少量出土する。

##### 所見

281.61m付近にV層がある。281.46mの砂礫層については、東側で溝状に落ち込む様子が観察できる。断面観察では、人為的削除は見られない。それ以外は明確な遺構は見てとれない。

##### 所見

瓦量が少なく、中心伽藍を構成するような瓦葺施設は付近には想定し難い。尚、砂礫面に見られた溝状の落ち込みについても、サブトレンチを入れてみたが、人為的遺構というよりも氾濫跡と判断することが妥当であろう。寺域端を示すような遺構もみてとれない。

#### 《tr 21-1-2》

南門想定地、かつてのtr H-1北の南端付近に設定した東西8.3m、南北3mの試掘坑である。

##### 層序

現地表283.02mより70cm下層にあたる282.32mにおいて、IV層に相当する水田床土を検出、その下層にあたる282.12mから281.82mにおいて暗褐色土が見られる。また、281.57mで砂礫層となる。

##### 遺物

多量の布目瓦がIV層中層にあたる282.37mからその下層にあたる281.67mの範囲に出土する。瓦層はかまぼこ状を呈し、一部で丸瓦が集中する。この丸瓦は行基式で概ね北東-南西方向と一定の方向を示し、あたかも屋根から滑り落ちたような様相を呈する。また、単弁八弁蓮華文丸瓦2点が出土している。上器片では8世紀前半から10世紀のものが出土する。

##### 遺構

281.67mから282.37mの間で瓦出土状況が示すかまぼこ状の高まりは、門基壇に影響された高まりの可能性がある。

##### 所見

この調査で確認された多量の瓦については、瓦葺屋根の倒壊に伴うものであろう。瓦は西に設定したtr 21-

13を含めての断面観察で西が高く東が低いかまぼこ状を呈することから、本試掘位置西側は一段高い構造を持っていたといえよう。瓦量と塔との位置関係から判断して、やや南西方向を中心に門基壇が存在する可能性が高い。

3次調査におけるtr-S2南側において大きく落ち込む溝が掘削されているが、この溝が寺域外周を巡る溝であるならば、検出された多量の瓦を伴う遺構は南門と考えるべきであろう。一方で、1~3次報告書によると7m南には礎石状の石がある。ここで想定する巾門と南門の距離が比較的近接していることからも、今後、付近の土地区画と併せて寺域の拡大、縮小を含めた追加検証が必要となる。

#### «tr 21-13»

tr 21-12で検出された瓦山上状況（出土する標高）と比較し、基壇の存在を裏付けるためにtr 21-12の西側に設定した東西2.9m、南北1.45mの試掘坑である。

##### 層序

現地表標高282.97mから65cm下層の282.32mでIV層に相当する水田床土を検出、282.02mから281.67mの間に瓦が出土する。281.67mでV層に相当する層が検出される。

##### 遺物

瓦は標高282.02mから281.67mの間に出土する。瓦はV層直上で少なくなるという今回調査でみられる一般的特徴を呈す。瓦出土面はtr 21-12よりも低く、小片となる。

##### 遺構

V層上層より黄色土ブロックが認められる。基壇を思わせる版築構造や硬化面は認められない。

##### 所見

tr 21-13はtr 21-12と比較して瓦出土位置が低く、出土する瓦も小片となる。また、基壇を想定させるような硬化面、版築構造は認められず、IV層とV層にあたる層も平坦な検出状況が見られる。このような状況はtr 21-12とは異なるものであり、tr 21-12の特異性がより明確になったものと考えられる。

また、tr 21-13のV層の上層に黄色土ブロックが僅かに認められる。試掘坑位置が南門想定地西にあたることから、このブロックの供給源として南門から延びる土壁、築地などを想定したうえで今後の調査計画を検討する必要がある。

#### (東門、東築地想定地付近)

東門についての記述は1~3次報告書IV章遺構の部分には、やや幅広に捉えられた東築地基壇について①「この位置に東門址も考えうるが、根拠は今のところない。」との記述がみられる。

尚、東築地については、③「礎を一面に敷いた遺構面が幅7mにわたって見られた」とこと、④「玉石が敷かれ、-60cmに基壇が考えられた。」との記述や、⑤「東基壇も幅6mで続くものと思われる。」の記述が見られる。

1~3次報告書では、東築地も一連の玉石をもつて基壇としているが、他の遺構同様に、玉石を再確認し、基壇構築要素として捉えるべきか検証する必要があると判断し、試掘坑を設定することとした。

#### «tr 21-7»

東門および東築地想定地の内側、かつてのtr-T1、T2付近に東西2.7m、南北2mの試掘坑を設定した。

##### 層序

現地表標高283.35mより75cm下層にあたる282.6mにおいて、砂礫層となる。砂礫層上は柔らかな砂層が堆積しており、IV層、V層とも検出されていない。

##### 遺物

砂層内より、布目瓦が出土するが、そのほとんどが小片であり、総量は少ない。また、かわらけ片等中世遺物が見られる。

##### 遺構

断面で砂層内、282.7mにてピット状の落ち込みを確認している。時期は不明である。

##### 所見

この試掘坑を見る限り、寺域想定地東側は河川の氾濫等の影響があるよう見られる。現地表標高が283.35mであるのに対して講堂と思われる山王神社境内の現標高は283.3mとほぼ等しい。しかしながら下層のしまり、砂粒の粗さ、密度には大きな差があることから、寺域東についてでは後世に砂を被っている可能性が高いと思われる。尚、中世のかわらけ等が散布している点から、付近に中世の建物等の遺構があると思われる。

#### « tr 21-8 »

東門および東築地想定地、かつてのtr-T1、T2付近に東西3m、南北1.4mの試掘坑を設定した。

##### 層序

現地表283.3mより80cm下層にあたる282.5mにおいて、礫層となる。礫層上は柔らかな砂屑が堆積しており、また耕作の擾乱も多い。礫面直上にわずかにIV層を思わせるような黄色層が見えるが砂基調である。V層は明らかに出来ない。

##### 遺物

砂層内より、布目瓦が出土するが、そのほとんどが小片であり、総量は多くない。また、かわらけ片等中世遺物も見られる。

##### 遺構

標高282.5mの礫層については、tr 21-6の礫面より不揃いであるが、tr 21-7ほど不揃いではない。

寺域想定地全域にいえることであるが、全体が砂層基調の地盤であり、その下層には砂礫層が広がっている。遺構保護の観点から礫面を掘り抜くことに制約もあり、砂礫層か基礎地盤面かの明確な判断基準を提示することは難しい。しかし、tr 21-7の礫層はtr 21-8の礫層よりも不揃いである。寺域東側については氾濫の影響を受けているが、部分的には影響が少なかった部分もあるように見える。

#### « tr 22-東1 »

寺本248番地北西部に設定。東西約2m、南北約5mとした。

##### 層序

現地表下50cmまで耕作土、以下黄色みをおびた砂層が堆積し、水田の床土は認められない。現地表下130cmで礫層となる。黄色みをおびた砂層は50cm以上堆積しており、層の中に小規模な河川氾濫の痕跡は見られない。比較的長期に安定していた層であろうと考えられるが、硬化面、地業跡は認められない。

##### 遺物

中世の土師質土器片が若干出土する。

##### 遺構

寺本に関する遺構は検出されていない。

##### 所見

しまりのない砂層が厚く堆積し、寺本廃寺に関する遺物、遺構は認められない。

#### « tr 22-東2 »

tr 22-東1の東隣に東西約2m、南北約4mの規模で設定。

##### 層序

現地表下50cmまで耕作土。水田の床土は認められない。現地表下60cmで黄色みをおびた砂層となり、現地表下80cmで礫層となる。

##### 遺物

布目瓦等寺本廃寺に関する遺物は認められない。11世紀に比定される上師器片が出土している。

##### 遺構

硬化面、地業跡等は認められない。

##### 所見

しまりのない砂層が厚く堆積し、寺本庵寺に関する遺物、遺構は認められない。

#### 『tr 22-東3』

tr 22-東2の東隣に東西約2m、南北約7mの規模で設定。

##### 層序

現地表下50cmまで耕作土、以下20cmの厚みで黄色をおびた砂層が現地表下80cmまで堆積し、以下礫層となる。耕作、抜根等の擾乱が目立つ。

##### 遺物

中世、近世の上師質土器片が見られる。10世紀後半から11世紀の灯明皿片が若干みられる。擾乱土中には布目瓦小片も見られる。

##### 遺構

硬化面、基壇、基礎地盤等寺本に関する遺構は認められない。

##### 所見

旧住宅地であり、擾乱が著しい。擾乱下層は河川氾濫面である砂礫が広がり、寺本庵寺跡の痕跡を見出すことは難しい状況にある。

#### 『tr 22-東4』

東西約8m、南北約2mの規模で設定。回廊を捉えることを目的とした試掘坑である。

##### 層序

現地表下50cmまで耕作土、以下にぶい橙色をおびた砂層がみられ、同層の中に人頭大蝶の右列状の集中が見られる。にぶい橙色をおびた砂層下で現地表下65cmから85cmの範囲で一部茶褐色のしまりのある層がみられるが、にぶい橙色砂層に広く切られている様子が観察できた。ここでとらえられた茶褐色土は、寺本寺域内で布目瓦出土面直下に見られる層である。茶褐色層下には黄色をおびた砂層が20cm前後の厚さで見られ、以下礫層となる。

##### 遺物

にぶい橙色層中の頭大蝶の集中部には、布目瓦小片も見られるが、15世紀、16世紀の上師質土器片、古錢、石臼などが目立つなかに11世紀に比定される墨書き器が1点みられた。尚、墨書きの文字は判読できない。6世紀後半の黒色処理された上師器片が出土している。

##### 遺構

人頭大蝶の右列状の集中については、石列内に石臼が入り込み、寺域内の瓦面直下に見られる茶褐色土面を切っている様子から中世の遺構であると判断したが、その機能、用途については不明である。

##### 所見

人頭大蝶による石列状遺構を確認したが、石臼、かわらけ等中世遺物が多く混入する点から、中世遺構と判断した。寺本庵寺遺構と判断できる遺構は認められていない。

#### 『tr 22-東5』

tr 22-東4の北に東西約2m、南北約4mの規模で設定。回廊の確認を目的とした。

##### 層序

現地表下50cmまで耕作土、以下tr 22-東4と同様の人頭大蝶集中に中世上師質土器、布目瓦が混在する。

##### 遺物

15世紀、16世紀の遺物が目立つ。ここでも礫中に石臼があり、tr 22-東4出土の石臼と接合出来た。15世紀に比定される古瀬戸のおろし皿、16世紀の墨書き「了」の文字がみられる皿などが出土している。古墳時代後期の須恵器蓋や土師器蓋もみられる。

##### 遺構

tr 22-東4から続く石列状遺構と判断した。

##### 所見

tr 22-東4同様、右列状遺構を確認した。寺本庵寺に関する遺構は捉えられていない。

## « t r 2 2 - 東 6 »

東西約2m、南北約5mの規模で設定。東門を捉えることを目的とした。

## 層所

現地表下50cmまで耕作土。以下20cmの黄色みをおびた砂層が見られ、以下礫層となる。

## 遺物

黄色みをおびた砂層にも擾乱の影響が及び、わずかに布目瓦小片も見られる。近世の瀬戸、青磁片が出土している。10世紀後半から11世紀の脚高高台付坏が1片出土している。

## 遺構

t r 2 2 - 東 4 で見られた茶褐色土層は見られず、河川氾濫の跡とみられる砂礫が広がる。寺本に関する硬化面等の遺構は認められない。

## 所見

河川氾濫の跡が試掘坑内に広がり、東門の痕跡を見出すことはできない。

## « t r 2 2 - 東 7 »

t r 2 2 - 東 5 と t r 2 2 - 東 1 ~ 2 の間に南北約2m、東西6mの規模で設定した。

## 層所

現地表下50cmまで耕作土、以下オリーブがかった砂質土が見られ、しまりのない褐色砂層が、オリーブがかった砂質層を切っている様子が観察出来た。褐色層下には黒褐色のやや粘質層がよどんだように溜まる。

## 遺構

褐色上下層の黒褐色粘質層中に拳人彫と若干の布目瓦と15世紀、16世紀の土師質土器片が多く認められる。

## 遺構

黒褐色粘質土を覆土とした溝状遺構が認められ、覆土中に水がよどんだような層が見られた。中世土師質土器片を多く含む特徴からt r 2 2 - 東 4 、t r 2 2 - 東 5 に統く中世遺構であると判断した。

## 所見

t r 2 2 - 東 4 、5、7において石列状遺構、溝状遺構が見られたが、これらのいずれも中世遺物を多く含む点から中世遺構と判断した。

## 第4章 主要伽藍における調査成果の検証

## 第1節 金堂

金堂について、1~3次報告書は瓦の集積と幅2mの帯状に散乱した河原石の範囲を以って位置と規模を想定している。すなわち、建物が直下に倒壊し、河原石は基壇外装と判断したことである。t r - Dでは基壇は捉えられていないが、t r 2 1 - 9において狭い範囲ではあるが基壇と思われる版築構造を確認した。

t r - Dの南側の河原石については、写真を見る限り河原石の上に瓦が覆いかぶさるように見えた。t r 2 2 - 6にて、この河原石集積の再確認を行った結果、幅2m程度の範囲に礫が認められることがあらためて確認できた。また、礫範囲よりも北側（金堂基壇想定範囲内）の下層には、幅10cm程の黒色土と灰黄褐色土が互層を呈しており、これらの互層構造をもって基礎地盤跡と判断してよいと思われる。

金堂について、試掘調査及び資料検証の結果から

①版築を伴う基壇状の土層が部分的に残る。

②t r 2 1 - 9で捉えられた版築状堆積を基壇と判断するならば、塔の貞西に位置することから法起寺式伽藍の金堂にあたる可能性が高い。

③南側に帯状に広がる河原石は、上に覆いかぶさるように堆積する瓦からみても、基壇外装の崩落に伴うものまたは基壇周囲を取り廻る石敷きの可能性が高い。

④基壇はt r - Cやt r 2 2 - 3までは延びない。

⑤塔心礎天端と比較してt r 2 1 - 9において捉えられた版築面は1.23m低いことから、基壇上部は大幅な削平

を受けている可能性が高い。  
ということが考えられる。

## 第2節 塔

寺本庵寺遺構のなかで、塔心礎のみが原位置を留める礎石とされている。白鳳期の塔心礎は、基壇中に埋没し、周囲礎石の天端が高い位置に来ることが一般的とされる。よって、寺本庵寺塔基壇上面は、少なくとも現在露出している心礎天端よりも高い位置にくることになる。この点について1～3次報告書は、心礎が乗る面で見られる河原石の密集を礎石根石と捉えることで、礎石天端が心礎天端よりも相当低かったものと判断している。

寺本庵寺塔心礎西の塀沿いには3石の礎石を見ることが出来る。これらはいずれも心礎よりも1.2m前後低い位置にある。1～3次報告書においてもこれら礎石が原位置を留めておらず、外側にずれ落ちていることが指摘されている。

近年の試掘調査において、塔心礎周辺の再調査は行っていないが、心礎が原位置を留めていることを前提にして1～3次報告書の記載内容を検証していくと

①心礎西の塀脇に見られる礎石は、原位置を留めず、「落とし」を受けている。

②礎石の厚さから判断すると、心礎周辺で礎石根石と捉えられた河原石の集積部は礎石の根石ではなく、礎石を安定させるために基壇中に用いた地岡め用の石の可能性が高い。

と考えられる。

## 第3節 講堂

1～3次報告書によると、講堂は山王神社境内地南側のクランク状道路に囲まれた位置にあったとされ、その根拠は検出された雨落溝ということであった。

講堂については塔や金堂と軒が近すぎる点や根拠とされていた雨落溝の屈曲が指摘され、その位置に疑問が持たれていた。

一方で、近年の試掘調査のなかで山王神社境内地に硬化面を捉えており、過去の試掘坑写真の検証のなかで境内地下層に敷かれた砾面を確認している。また、境内地には礎石も多く見られることから、講堂を山王神社境内地に想定するべきとの考え方主流となってきている。

すなわち、

①山王神社境内地には現地表下30cm下層で硬化面が見られる。

②山王神社硬化面下層には地業を思わせるような礎面が広がる。

③川干神社境内地には、転用された礎石や隅に片付けられた礎石が少なくとも1点見られる。

④報告書に示されている講堂雨落溝は途中で屈曲し、東側延長線上に検出されている水路状石列ラインと一致する。そのため、講堂雨落溝とは判断し難い。

という状況から、講堂は報告書の示す位置よりも後退し、山上神社境内地と判断するべきである。

尚、山王神社境内地に講堂が位置するという考え方は、石田茂作氏の指摘と一致する。

## 第4節 中門

平成19年度調査では、1～3次報告書が示す寺本庵寺中門南端および参道想定位の試掘調査を実施した。さらに、22年度調査では、面的な発掘調査を実施している。これらの調査で確認できた点としては、

①標高282.2mから282.4m付近に厚さ20cmほどの水田床土状の面(IV層)があり、瓦はその下層付近から平面的に出土する。(19、22年度調査)

②V肩は約10～15cmの層に分離できるが、しまりはなく、各層のベースはシルト質砂層で色調も大きな変化はない。(19年度調査)

③石列、玉石面とともに水田床土面(IV層)の直下にあたるV層上面にあり、標高は282.0mから282.2m付近である。(19、22年度調査)

④石列、玉石面には、礫の全く無い空間がある。(19、22年度調査)

- ⑤1～3次報告書で参道耳石と想定された石列の西3mで西側に面を持つ石列が確認された。(22年度調査)
- ⑥石列は南側では南北方向に石の長軸を用いて(横口)並べているが北側では東西方向に石の長軸を用いて(小口)東側に面取りをしながら並べている。横口配置の範囲は石列が湾曲しており、石の数を間引いての積み直し(修理)の印象を受ける。(19、22年度調査)※階段部が小口の可能性あり
- ⑦石列と礎面はV層上面に1面しかない。(19年度調査)
- ⑧玉石面よりも10cm下層で山城時代住居跡プランが検出できる。(19、20年度調査)
- ⑨1～3次報告書で想定する中門南東コーナーでは玉石が薄い。一方で、南西コーナー、参道正面部分では玉石が濃い。(19年度調査)
- ⑩中門想定位置の玉石は黒褐色シルト層の中にある。(19、22年度調査)
- ⑪V層下層で掘り込み地業状の土層が認められる。(22年度調査)
- ⑫V層中層より、地山に掘り込むピット状遺構がある。確認面は標高281.8m付近、ピットには柱痕や礎板石を伴うものがある。(19年度調査)
- ⑬V層中層付近にも場所によって黒褐色シルト層が見られるが礎は含まない。(19年度調査)
- ⑭石列や玉石に対して塔心礎天端は2m高い標高284mにある。(19、22年度調査)
- などの点が挙げられる。

①の水田床十層(IV層)は、山上神社境内地や金堂想定地西部、寺域東側を除き調査区全体に広がることが確認できている。このことが中門付近はもとより地域内全体にわたって寺本庵寺跡の痕跡が消されている大きな要因となっている。<sup>⑮</sup>が示す塔心礎と礎面の高低差2mという位置関係と南へ0.5／25mというV層上面での傾斜地形から、中門基壇はIV層水田造成時にほぼ削平されたと考えるべきであろう。

⑤の参道耳石とこれまでの石列の西側3mで確認された石列は、既存石列と同様小ぶりな自然隕を使用しており、中門とされていた礎集積部南側に取り付くことが確認された。1～3次報告書では、既存石列を参道耳石四列として中門を想定復元しているが、これを中門に取り付く参道耳石とするならば中門は想定よりも参道幅3m分西側に掘れることになる。これは、⑨の玉石の濃薄のデータとも一致する。さらに、⑥に基づき判断するならば、参道耳石とされる石列については修理が施された可能性が想定できよう。

⑦については、中門想定地の礎面や参道耳石とされる石列が人為的な遺構である可能性を物語っている。

⑧の古墳時代の住居と石列との関係は、石列や玉石を配するために深い地業を要しない、または石列や玉石が地業面の底付近にあたることを意味する。

⑩の玉石と黒褐色シルトの関係はtr19-3やtr19-4においてみられた。この黒褐色シルトが中門等の掘り込み地業最下層を示すのではないかと想定しよう。平成22年度調査において、中門想定地を面的に調査したが、玉石面には黒褐色シルト層の広がりが確認でき、さらに10cm程度の掘り込みではあるが、基礎地業跡と思われる掘り込み跡とその下層に堆積する厚さ数cmの黒褐色シルト層を検出した。

⑪については、22年度調査中門想定地調査範囲東の南北メインセクションで確認された。IV層水田床土下層、V層に相当する灰茶褐色の砂質土中に、しまりのある明るい色調の土層が掘り込まれている状況が観察でき、さらにその下層に薄く黒褐色シルトが水平堆積していた。掘り込まれた位置は、中門想定地礎集積範囲南辺とほぼ一致し、礎下層のレベルとも概ね一致する。

⑫のIV層中層のピット状遺構については、時期を明確にすることは出来ない。確認面は標高281.8m付近でピットは直径60cm以上と大ぶりで地山を貫く柱痕や礎板石を伴うものがあることから、大型建物に伴う柱穴を想定してもよい。V層中では瓦当土量が少ないとから、このピットが瓦葺建物の柱穴とは想定し難い。付近で検出されている古墳時代後期の住居跡との時期関係とピットの広がりを再確認する必要があるが、中門に関わる可能性が高い礎面遺構を破壊することになるため、慎重な判断を要す。

寺本庵寺中門については概ね1～3次報告書の示す位置に存在する可能性が高いと考えられるが、南に延びる石列を参道に伴う遺構とするならば少なくとも報告書の想定よりも3m西に位置するべきであり、寺域のほぼ全域を覆うIV層水田床上の土層と掘り込み地業跡とみられる土層から判断し、基壇は削平されたと思われる。さらに、鬼高窓住居プランが確認できる面と掘り込み地業と思われる土層、参道耳石と考えられる石列との高さ関係から判断すると、造成時掘り込み地業についてもそれほど大規模な掘削行為を行っていないのではないかと考えられる。

## 第5節 南門

1～3次報告書によると、南門は県指定範囲の南を東西に走る道路上に想定されており、平成21年度に実施された試掘調査においても、ほぼ想定位で屋根から滑り落ちたような状況で検出された丸瓦の集中箇所などを捉えている。

南門についての検証の結果、

① tr21-12の試掘坑東端から丸瓦があたかも屋根から滑り落ちたような状況で検出された。それらの丸瓦は行基式である。

② tr21-12の試掘坑内で見られた瓦面は、他の試掘坑の出土状況が平面的なのに対して、かまぼこ状になっていたことから、瓦面に周囲よりも一段高い構造物があったことが想定される。

③ tr-Hなど過去の試掘坑写真には、現道路付近を中心に石で区画された高まりが写っている。

という肯定的因素が認められる一方で、

④ 1～3次報告書位置に南門を想定すると、中門に近接しすぎることになる。

⑤ 1～3次報告書には南門想定地よりも南に礎石状の石ある

という疑問が解決できない。

よって、南門については、今後も更なる追加検証が必要になる。教育委員会では、南門想定地以南の試掘調査を計画し、検証作業を進めることとしている。

## 第6節 中軸及び伽藍形式

寺本廐寺跡は石田茂作氏の調査以来法起寺式とされてきた。1～3次報告書に記す調査もこの法起寺式を念頭にトレンド位質を設定し、確認された石列、玉石の集積を以て伽藍を確定する作業を行ってきたとのことである。そこで疑問となるのが法起寺式を想定した根拠である。塔心礎の位置は動いていないというのが研究者諸氏の判断であるが、この判断に基づき公園や明治期の分間図を見ると、塔心礎、道、神社、水路の配置などが法起寺式伽藍（基壇などの硬化面や構造物）の影響を受けての配置になっているように読み取れる。

また、近年の調査においても若干の位置のずれはあるにせよ、概ね心礎と金堂と思われる基壇、講堂基壇と思われる硬面化、中門とされる礎集積部と参道耳石と想定される2列の石列の配置が概ね菱形に配されるように見て取れる。

寺域北辺については、地割の方向の変化を根拠に山上神社北側の道とすることが自然であると考えられるが、現状までの調査成果のなかでは築地跡、外周溝、掘立柱の並びなどにおいて断片的に可能性を示す遺構はあるものの、面的な根拠を見出すには至っていない。

東辺については河川氾濫による砂礫層の堆積、中世遺構の存在などにより、寺域の確定はより難しい状況にある。

報告書に示された西門礎石については周囲で確認されている鬼高期住居確認面よりも下層にあることから「落とし」が行われていると思われる。よって、礎石の原位置を示すものではないが、大きな距離を移動しているものとは考え難い。尚、この西門礎石が確認された畑は晴天が続くと表面耕作土が赤褐色に見える。地下の比較的浅い部分に赤褐色土の供給源となるような異質な土（基壇など）が存在する可能性に期待を残し、今後追加調査を行う計画である。

寺の中軸線という考え方があり立つかどうかは別として、中門想定地から南に延びる2列の石列の存在が確認された。これを参道遺構と解釈するならば参道は、正方位より東に概ね2度20分偏していることになる。この角度は石田茂作氏が示す塔礎石に基づく軸線「正しく東西南北を指さずに、西南に6度偏している」に対してやや開きがある。石田氏が磁北をとっているならば約1度の誤差となる。1～3次報告書による方位は「N-5°-E（磁北より）真北より50'東に偏している」とある。寺本廐寺における磁北は真北より5度4分9秒Eに偏していることから、この記述は磁北より5度東に偏し、真北より50分東に偏していると解釈するが、この報告書の示す方位も2次調査で検出された参道耳石を根拠にしたものであろう。

寺本廐寺寺域内は中世以降、大規模な水田造成が行われた様子が土層より確認できる。その造成は山王神社境内地（講堂）、塔心礎周辺など一部を残し寺域内の建物基壇や生活面を削除したものと考えられる。瓦についても、水田床土直下に平面的に出土する状況から、水田造成時に床上への影響を減らすべく平坦に均している可能性がある。また、平成22年度調査において、水田床土上層から掘り抜いて瓦を一括廻棄している箇所が見つかっている。このことか

ら、IV層水田床土と瓦面の間に水田層造成の影響を受けていない層を見出すことが出来なければ1～3次報告書に見られるような瓦の集積を根拠に伽藍配置を想定することには無理があると云わざるを得ない。

寺本庵寺の伽藍配置について、近年の調査及び検証作業を進める中で、少なくとも

①講堂が1～3次報告書想定位置よりも後退し、山王神社境内地に収まる可能性が高い。

②金堂は1～3次報告書が示すよりも西で完結する可能性が高い。

③中門は1～3次報告書が想定する位置よりも3m西に寄る可能性が高い。

④寺本庵寺域内は中世以降の水田造成により大規模に削平され、中門基壇はほぼ削平された可能性が高い。

⑤参道耳石と考えられる石列を根拠にするならば寺本庵寺軸線は真北に対して概ね2度20分東に偏している。

⑥礎石は周囲に持ち出され、道祖神場等で2次利用されているものがある。

という点が確認された。

一方で、金堂、講堂の範囲、規模を明確にするに至っていない。今後、公有地化を進める中で、面的な調査を実施し、これらの課題を探る必要がある。



寺本庵寺跡全景



寺本庵寺跡中心伽藍想定地



tr20-1



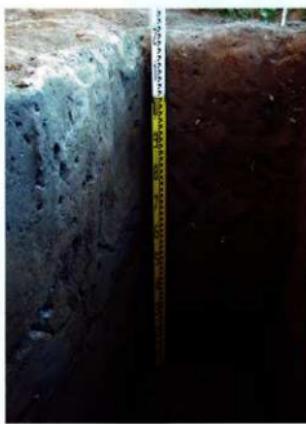
tr21-1



tr21-2



tr21-4



tr20-2



tr20-3



tr21-5



tr21-6



tr22-1



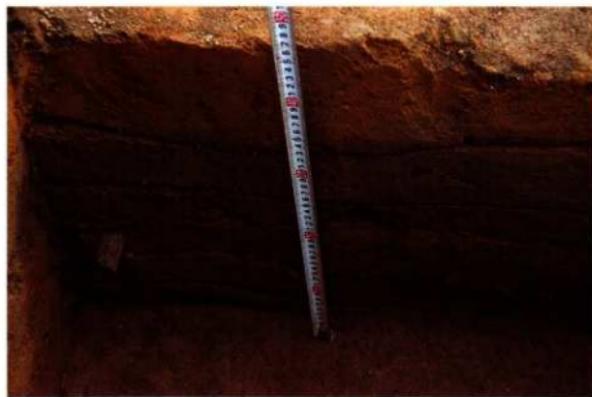
tr22-2



tr20-4



tr20-5



tr21-9



tr22-3



tr22-6



tr19-1



tr19-2



tr19-3



tr19-4



tr20-7



tr21-10





tr22-4-4-1



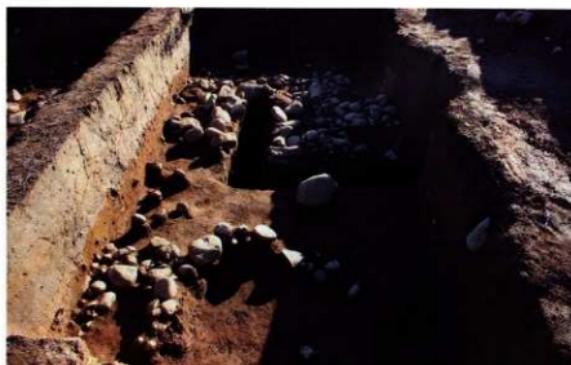
tr22-4-1



tr22-4-3



tr22-4-4



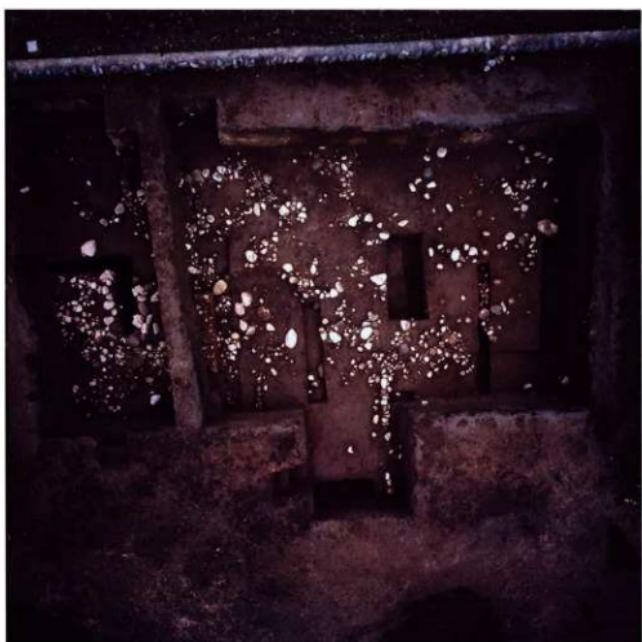
tr22-5-1 碓面



tr22-5-1 碓面上層



tr22-5-1 碓面下層断面



tr22-5-3



tr22-5-3 東壁断面



tr22-5-1 磚面下断面



tr22-4-3 参道耳石



tr22-5-3 西側参道耳石



tr21-12



tr21-13



tr21-13 粘土ブロック



tr21-7



tr21-8



tr22 東 -1



tr22 東 -2



tr22 東 -3



tr22 東 -4



tr22 東 -5



tr22 東 -6



tr22 東 -7





tr21-1 出土土器



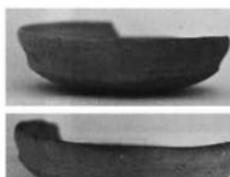
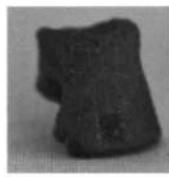
tr21-2 出土土器



tr21-4 出土土器

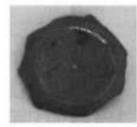
tr22-3 出土土器

tr22-4-1 出土土器

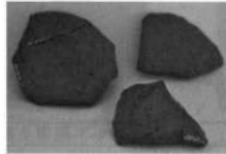


tr22-4-2 出土土器

tr22-4-3 出土土器



tr22-5-1 出土土器

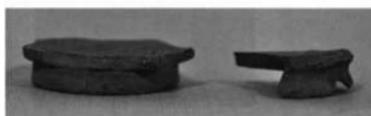
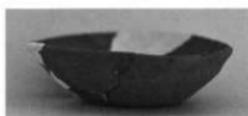


tr22-5-3 出土土器



tr21-12 出土土器

tr21-13 出土土器

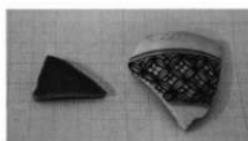


tr21-7 出土土器

tr22- 東 7 出土土器

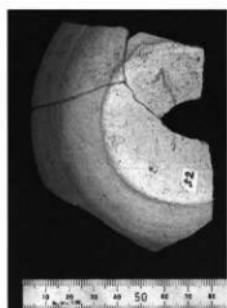


tr22- 東 4 出土土器・石器



tr22- 東 6 出土土器等

tr22- 東 7 出土土器・石器



tr22-4-1 墨書き土器「桜院」

tr22-4-1 墨書き土器「守」「千」

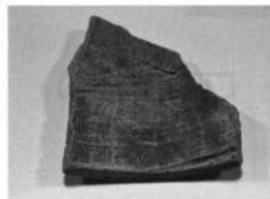
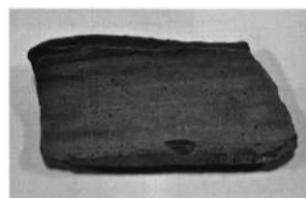
tr22-4-1 墨書き土器「了」



tr21-1 出土瓦



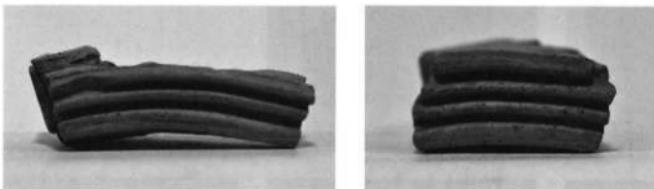
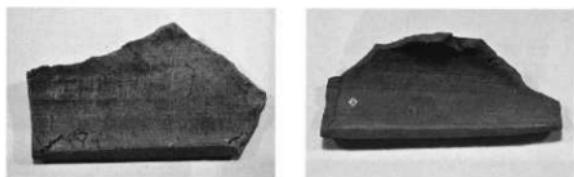
tr22-4-1 出土瓦



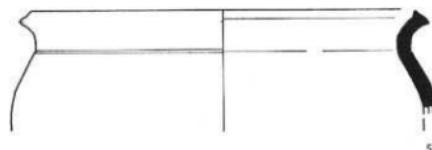
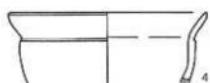
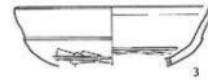
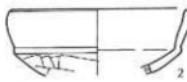
tr22-5-3 出土瓦



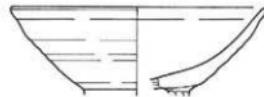
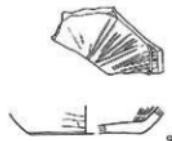
tr21-12 出土瓦



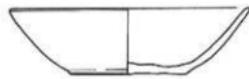
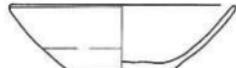
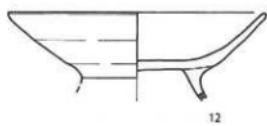
tr21-13 出土瓦



21-1Tr



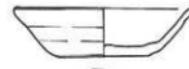
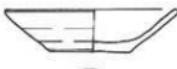
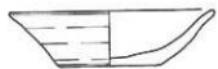
11



14

12

13



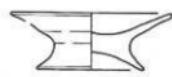
17

15

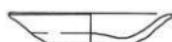
16

21-2Tr

0 10 cm



18



19

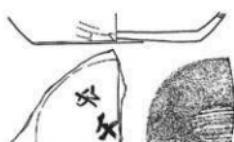


20



21

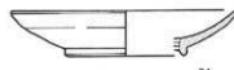
21-2Tr



22



23



24

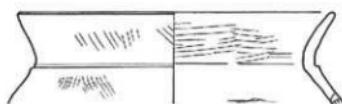


25

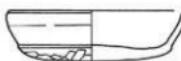


26

21-3Tr



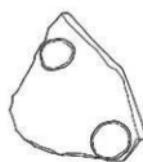
27



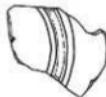
28



21-4Tr



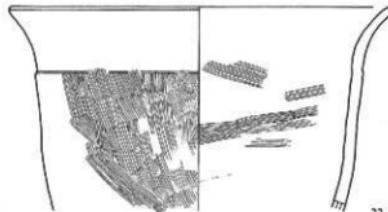
30



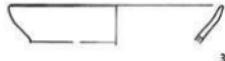
32



21-5Tr



33



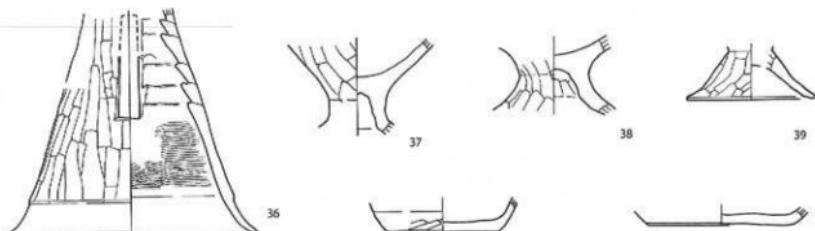
34



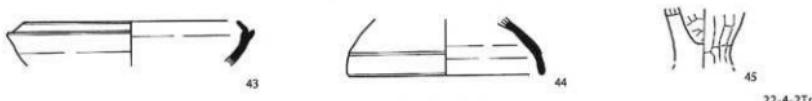
35

22-3Tr

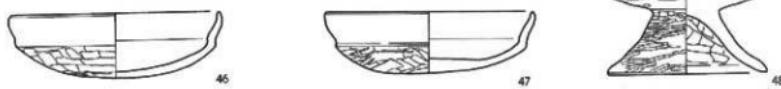




22-4-1Tr



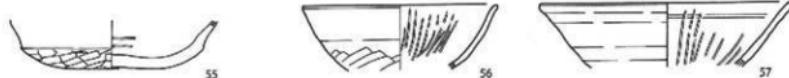
22-4-2Tr



22-4-3Tr



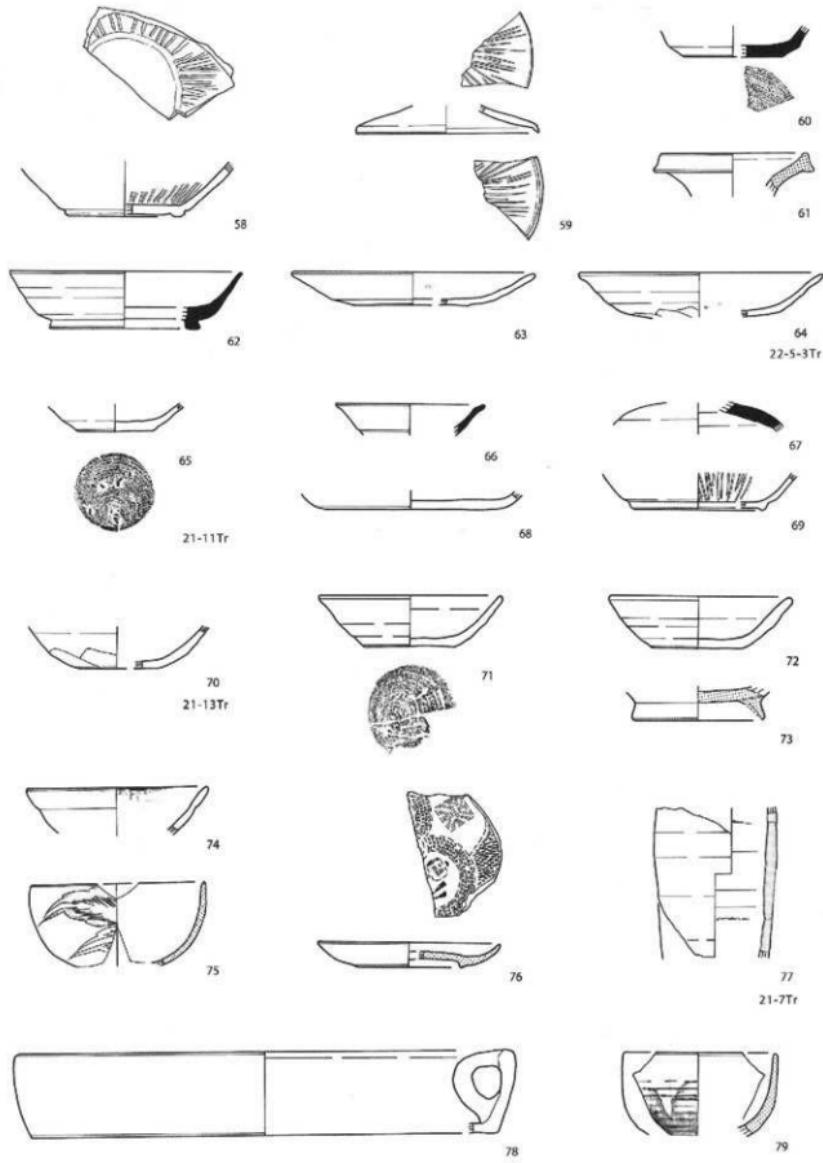
22-5-2Tr



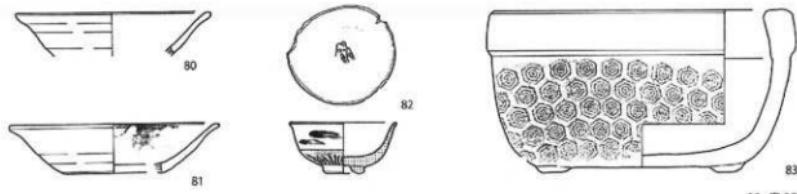
22-5-3Tr

1.0 cm

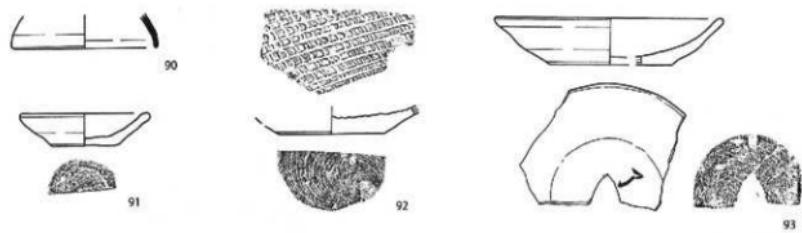
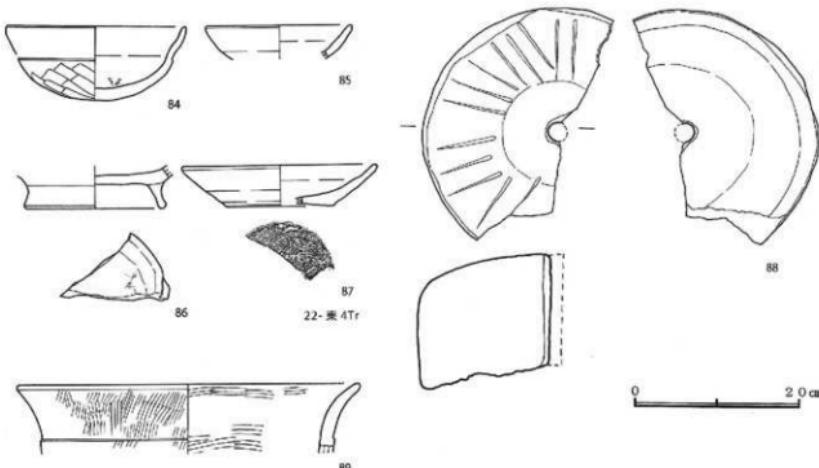
0



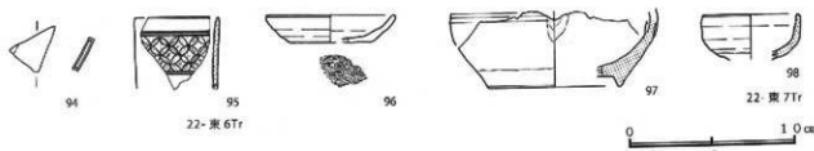
0 1 10 cm

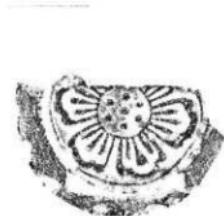


22-東 3Tr



22-東 5Tr





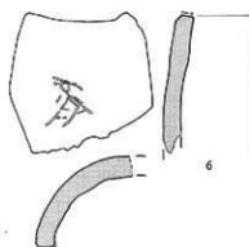
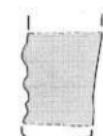
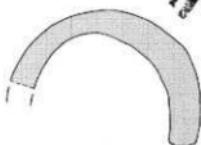
Tr21-1



2  
Tr22-2



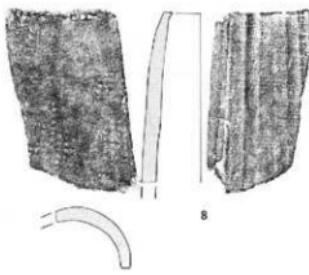
3  
Tr22-4-1



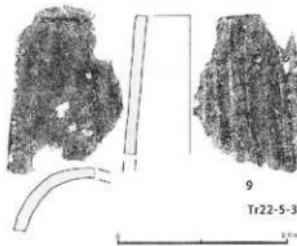
6



7



8



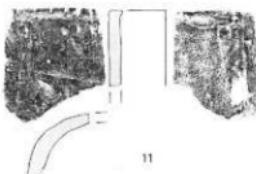
9

Tr22-4-1

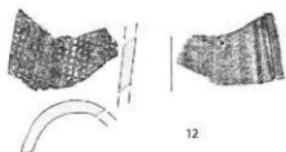
2 cm



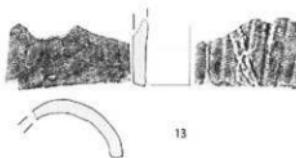
10



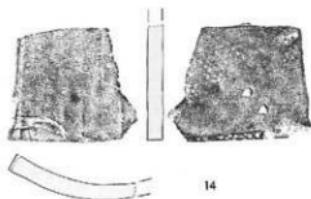
11



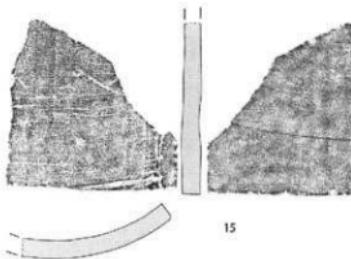
12



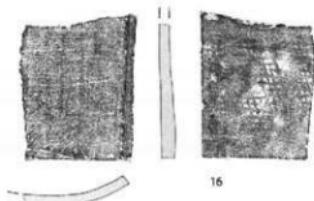
13



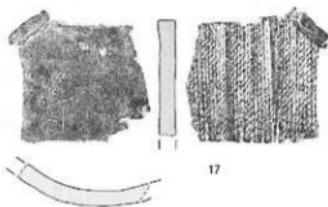
14



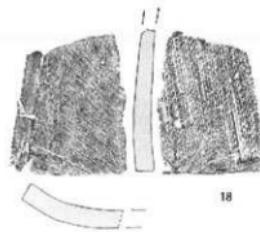
15



16



17



18



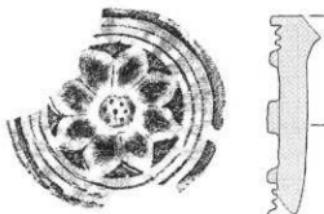
Tr22-5-3

1 2 cm

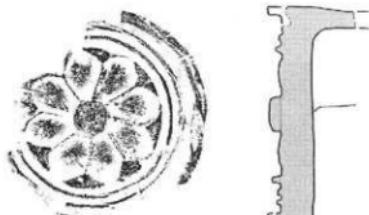


20

Tr21-11



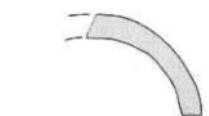
21



22



23



24



25

Tr21-12

0 2.0 cm



27



29

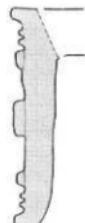


30

31  
Tr21-12



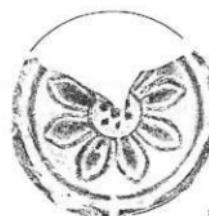
32



33



34



35



36



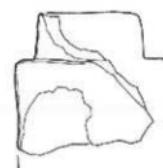
37



38



39



40



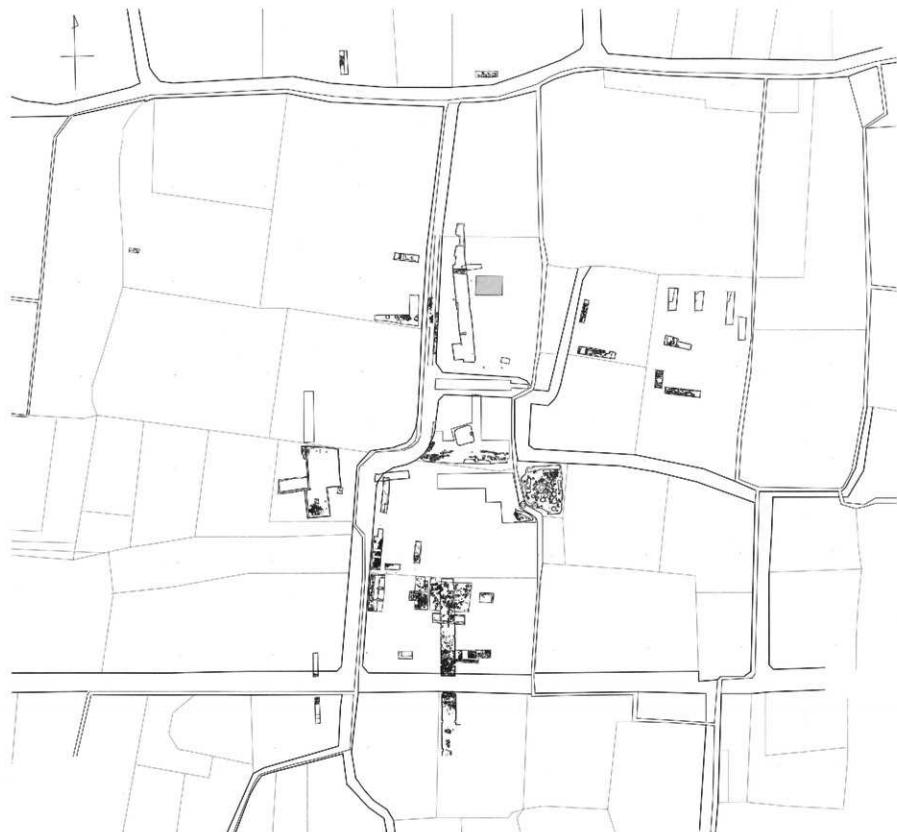
Tr21-7

0 2.0 cm

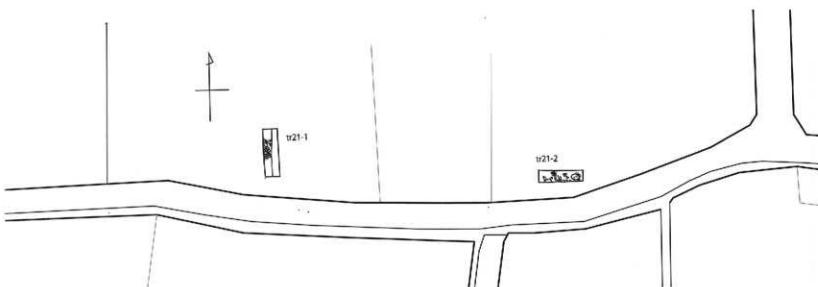
Tr21-13

寺本廃寺跡 試掘調査報告書 図面集

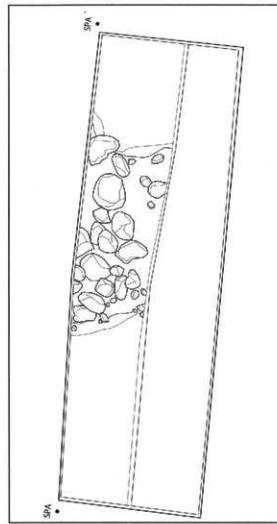




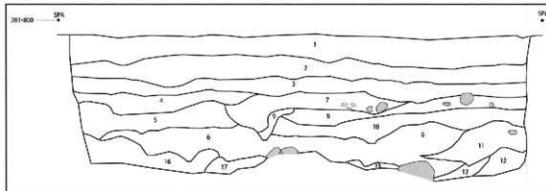
寺本庵寺跡試掘坑配置図 (1/800)



北門想定地付近試掘坑位置図(1/400)

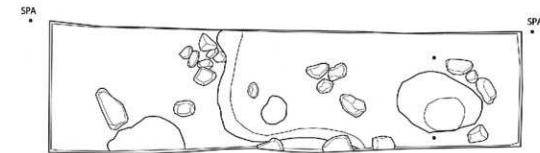


tr21-1 平面図及びセクション図(1/400)



tr21-1

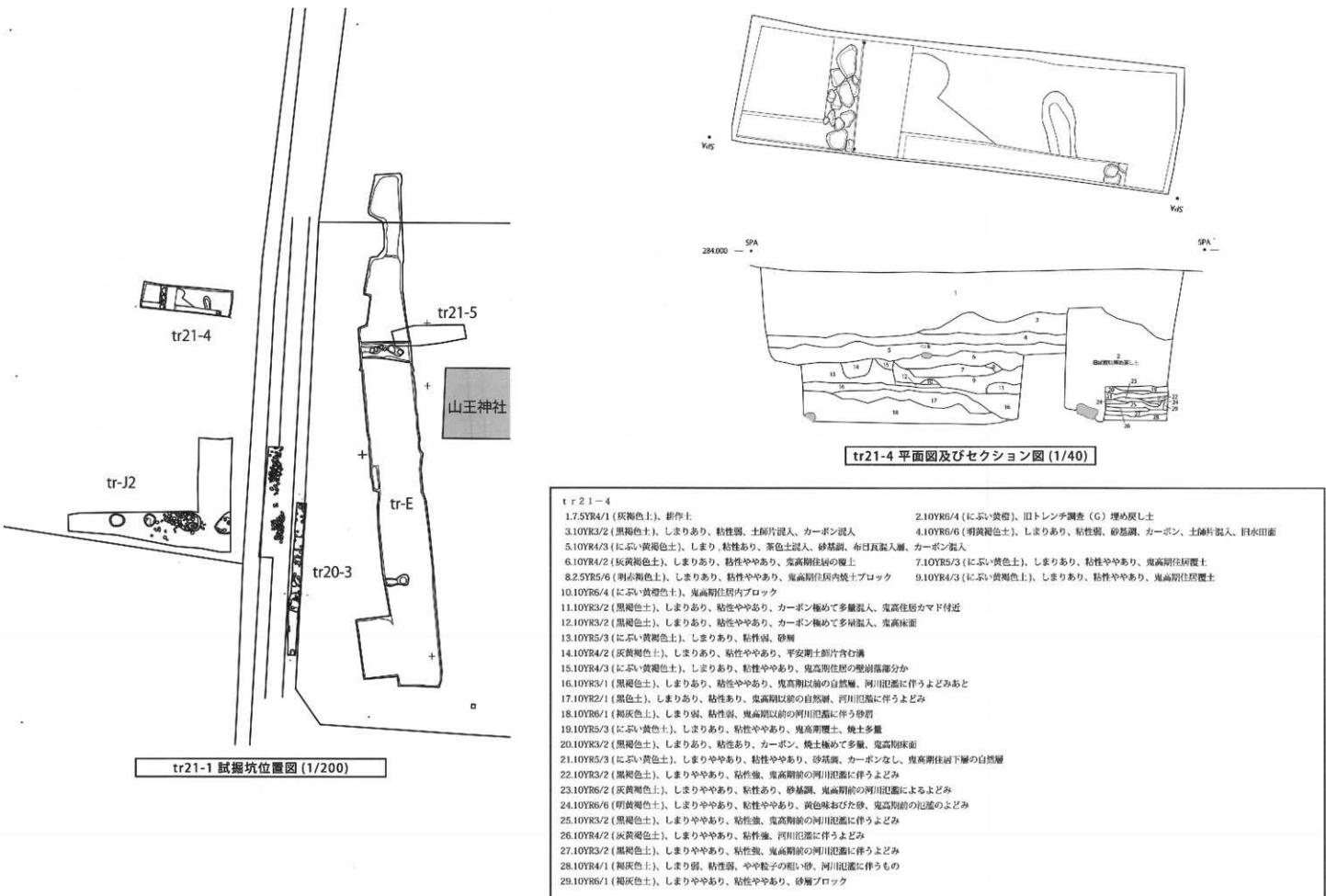
1. 5YR4/1 (褐色色土)、耕土層、砂基
2. 7.5YR6/6 (褐色土)、しまりあり、粘性あり、水田床土
3. 7.5YR4/2 (灰褐色土上)、しまりあり、粘性弱、砂層
4. 7.5YR4/2 (褐色色土)、ややしまりあり、粘性弱、カーボン混入、砂層
5. 7.5YR4/2 (灰褐色土)、しまりあり、粘性弱、カーボンや砂混入
6. 7.5YR4/1 (褐色色土)、しまりあり、粘性弱、白色の川砂多量(砂たまり)
7. 7.5YR3/1 (黒褐色土)、しまり弱、粘性弱、砂だまり、土解片含入、礫混入
8. 10YR3/2 (黒褐色土)、しまりあり、粘性弱
9. 10YR3/1 (黒褐色土)、しまりあり、粘性弱
10. 10YR4/1 (褐色色土)、しまりあり、粘性弱
11. 10YR2/2 (黑褐色土)、しまりあり、粘性弱ややあり
12. 5YR5/6 (明赤褐色土)、しまり弱、粘分多量に含む
13. 7.5YR4/1 (褐色色土)、しまり弱、粘性弱、砂だまり
14. 5YR5/6 (明赤褐色土)、しまり強、粘性弱、鉄分多量含む
15. 7.5YR3/1 (黑褐色土)、しまりあり、粘性弱
16. 7.5YR2/1 (褐色土)、しまりややあり、粘性弱
17. 7.5YR2/2 (黑褐色土)、しまりややあり、粘性弱

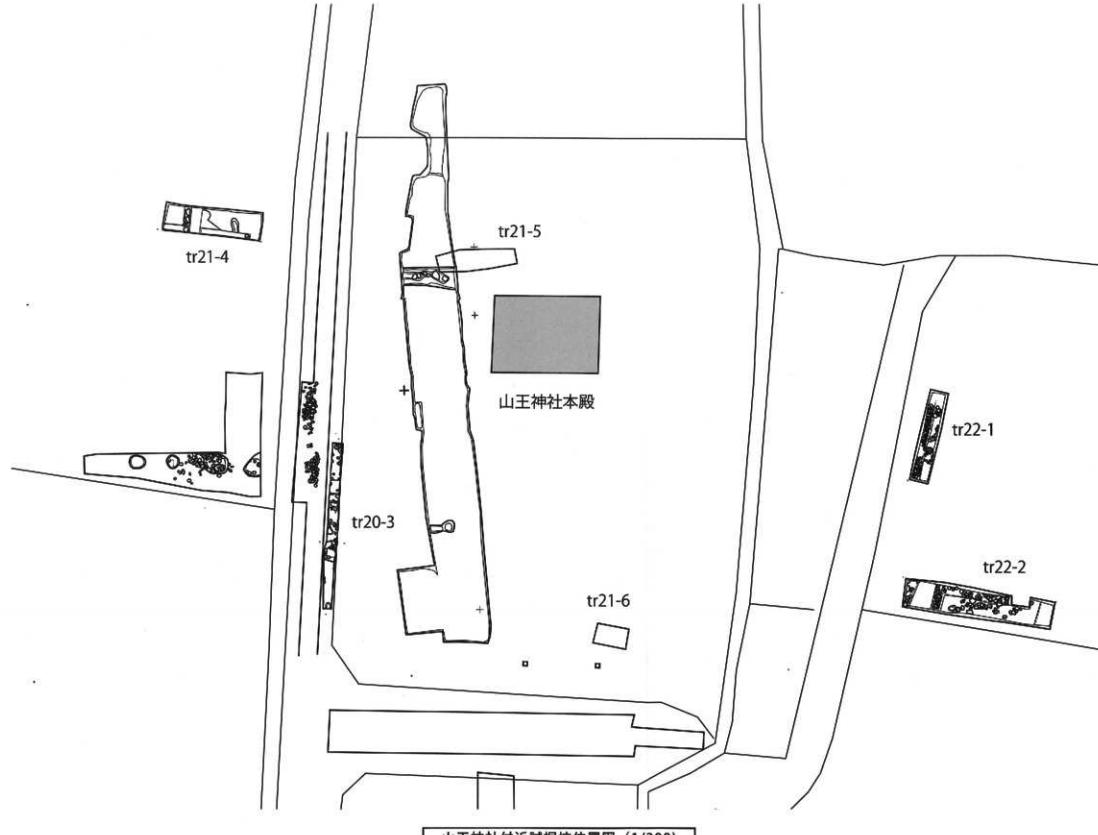


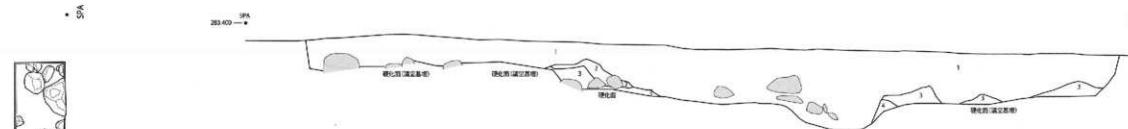
tr21-2 平面図及びセクション図(1/400)

tr21-2

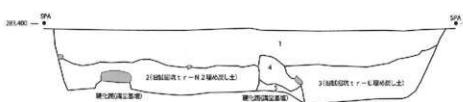
1. 耕作土
2. 7.5YR6/6 (褐色土)、水田床土
3. 7.5YR4/1 (褐褐色土)、しまりあり、粘性弱、平安土済片含む、カーボン混入、住居覆土
4. 7.5YR3/1 (黒褐色土)、しまり強、粘性あり、砂に茶褐色土混入、礫削上層くしめている
5. 10YR3/1 (黒褐色土)、しまり、粘性あり、砂に茶褐色土混入、平安住居の覆土、小礫混入
6. 10YR4/2 (灰黄褐色土)、しまり、粘性あり、砂に茶褐色土混入、カーボン混入、平安住居覆土
7. 10YR4/2 (灰褐色土)、しまり強、粘性あり、季人連多く混入、鉄分多量混入





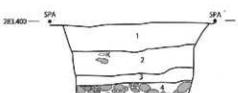


tr20-3 平面図及びセクション図 (1/40)



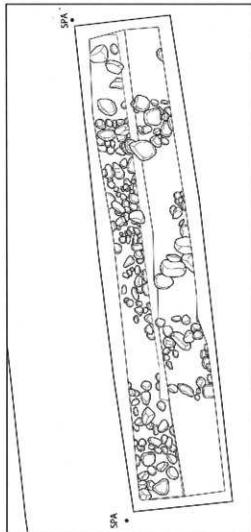
tr21-5 セクション図 (1/40)

- tr 21-5
1. 現表土
  2. 旧トレンチ (N2) 埋め戻し土
  3. 旧トレンチ (E) 埋め戻し土
  4. 10YR6/4 (にい黄褐色土)、しまりあり、粘性弱、非常に細かい粒子
  5. 10YR5/4 (にい黄褐色土)、しまりあり、粘性弱、非常に細かい粒子



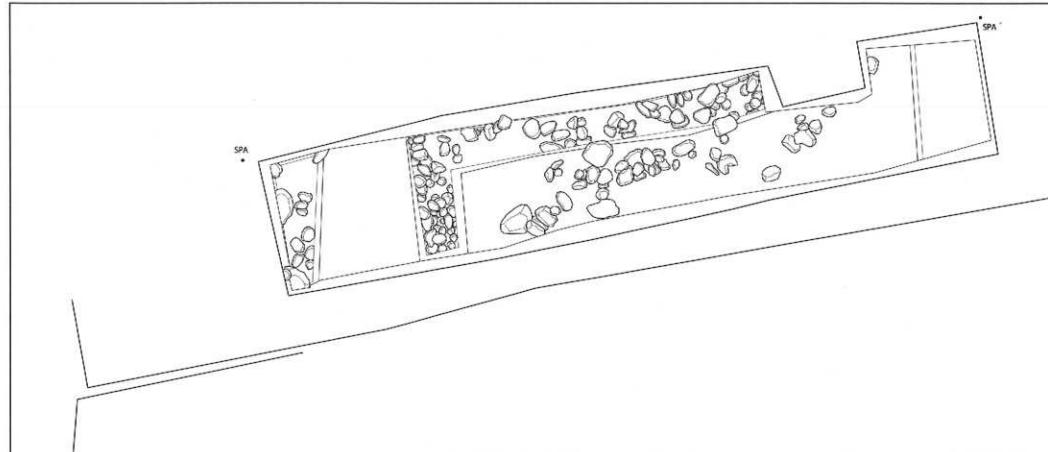
tr21-6 セクション図 (1/40)

- tr 21-6
1. 表土
  2. 10YR6/4 (にい黄褐色土)、しまりややあり、粘性ややあり、粗かい砂層、布目瓦ややむ
  3. 5YR4/6 (赤褐色土)、しまりあり、粘性あり、鉄分多く混入、砂基層、布目瓦含む無
  4. 砂礫層、砂は鉄分多くやや赤みをおびてている

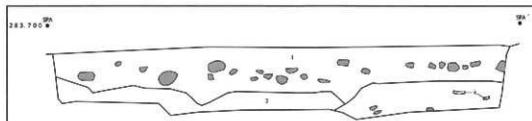


tr22-1 平面図及びセクション図 (1/40)

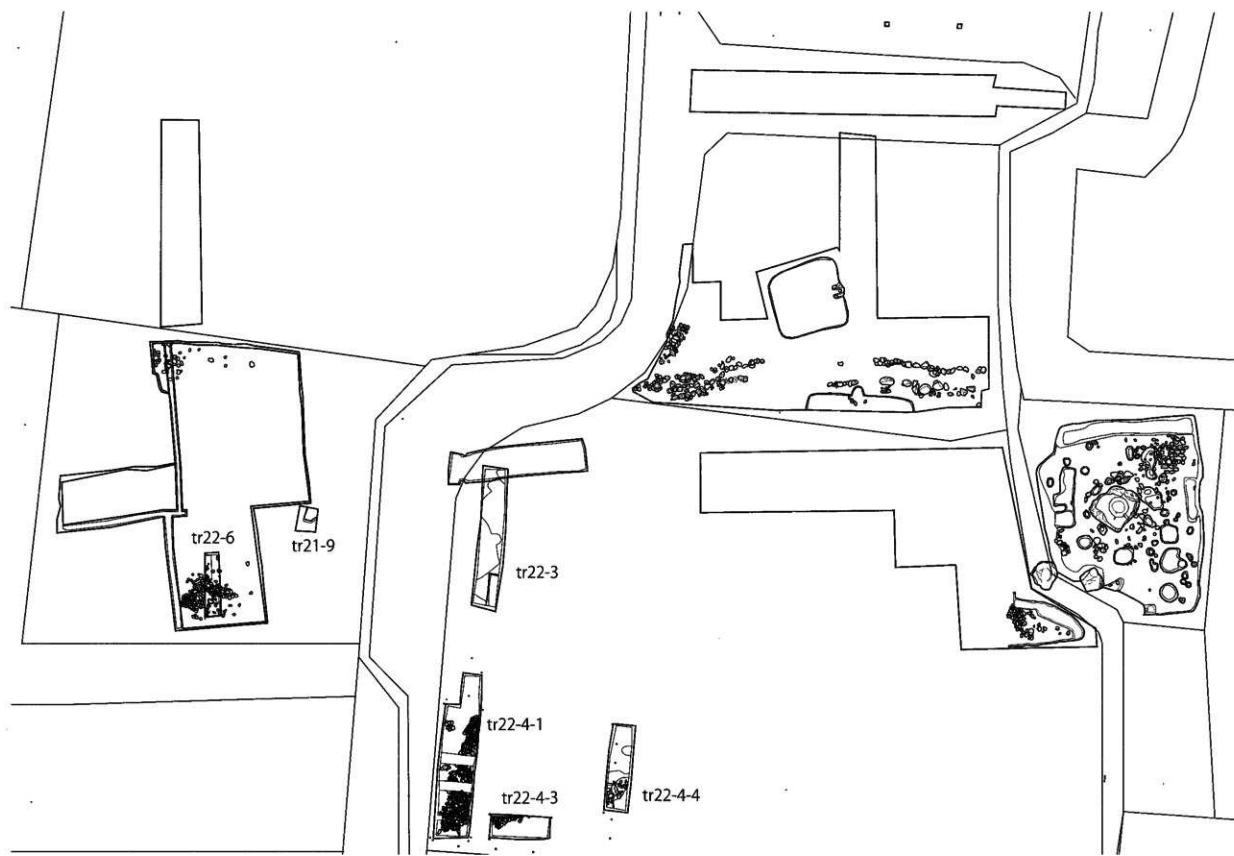
- tr22-1  
1.耕作土  
2.10YR5/4(にぶい黄褐色土)、しまりややあり、粘性層、砂礫層



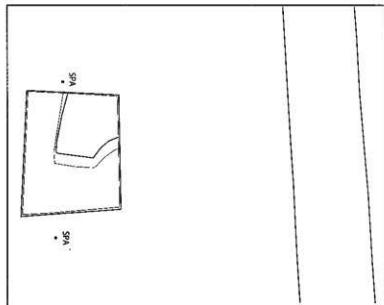
tr22-2 平面図及びセクション図 (1/40)



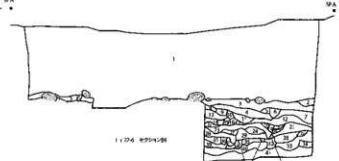
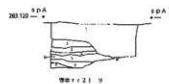
- tr22-2  
1.耕作土及び新しい雑乱  
2.10YR5/4(にぶい黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、粘質ブロック混入、3層混乱層の上層を整地したと思われる層、擁底  
3.10YR3/4(暗褐色土)、しまり強、粘性弱、カーボン、礫混入、擁乱(木机、セメント混入)  
4.10YR4/3(にぶい黄褐色土)、しまり弱、粘性弱、砂基層、雑乱  
5.10YR5/4(にぶい黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入



金堂想定値付近試掘坑位置図 (1/200)



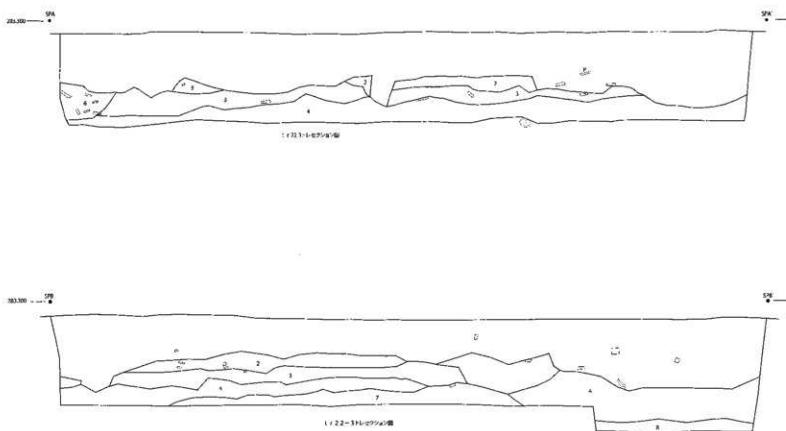
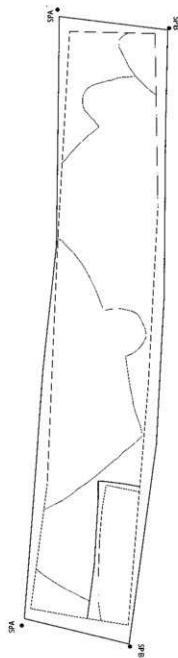
tr21-9 平面図及びセクション図 (1/40)



tr22-6 平面図及びセクション図 (1/40)

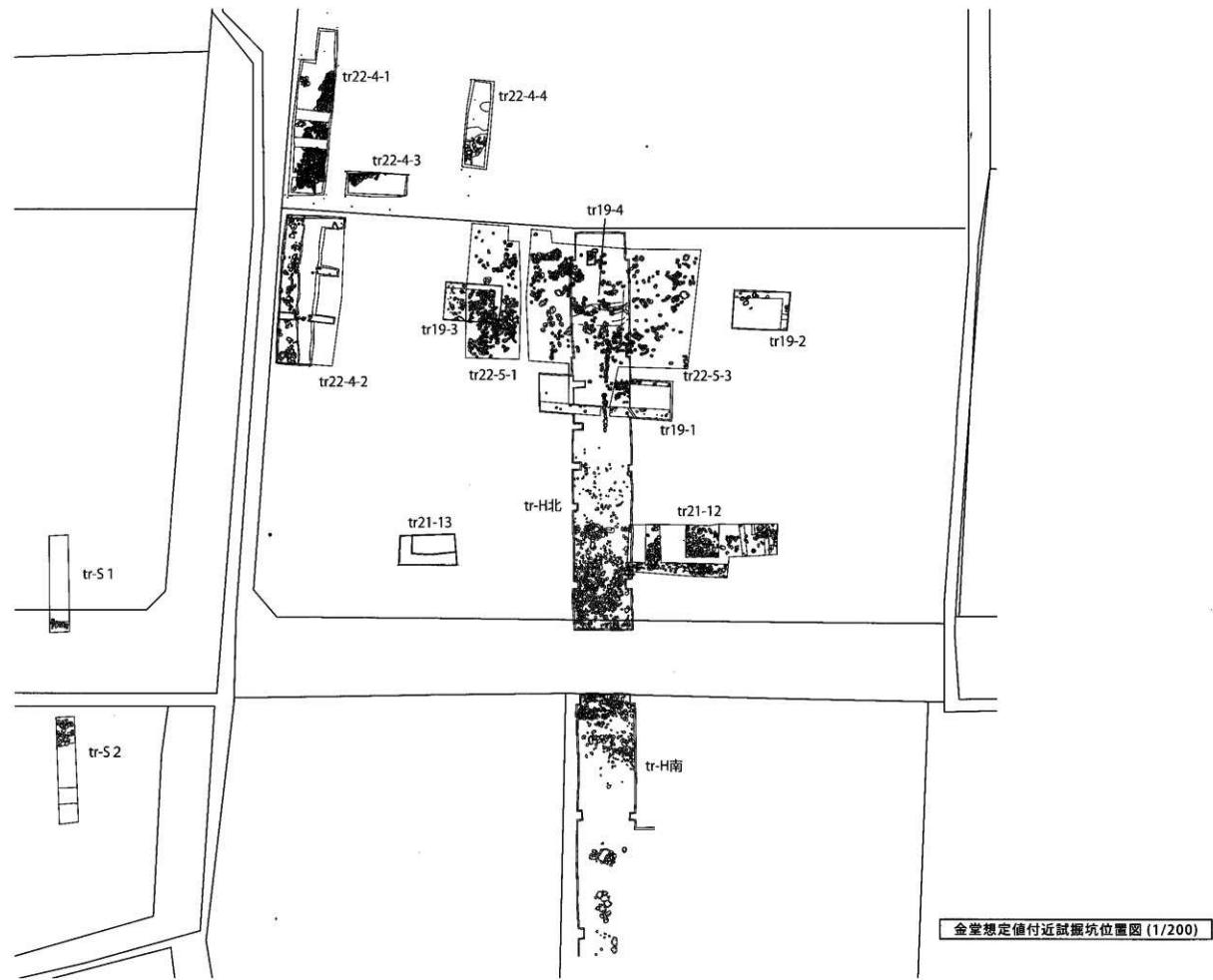
t r 2 1 - 9
1. 新作土
2. 10YR6/8 (明黄褐色土), しまりあり、粘性あり、ローム基調で固くしまる。付近にローム層はなくローム基調の層は初めて検出される。これをもって盆地基盤と判断した
3. 10YR4/1 (褐色土), しまりあり、粘性あり
4. 10YR2/3 (黒褐色土), しまり始めで粘性あり、叩き練められたように固く、基層の液限と判断した
5. 10YR6/6 (明黄褐色土), しまりあり、粘性あり、2層と違って砂が基層となるが固く練まっている
6. 10YR4/4 (褐色土), しまりあり、粘性弱、砂基調で茶褐色土が混入
7. 10YR3/2 (深褐色土), しまりあり、粘性ややあり、砂基調

- t r 2 2 - 6
1. 7.5YR5/4 (にじい褐色土), 旧トレンチ埋め戻し土、黄色ブロック多く混入 (基層から tr21-9 トレンチの基層と類似した色)
  2. 10YR5/4 (にじい黃褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  3. 10YR4/1 (褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  4. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入、黄色土ブロック混入
  5. 10YR5/1 (褐色土), しまりより、粘性ややあり、砂質上部ブロック混入
  6. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりより、粘性あり、カーボン混入
  7. 10YR4/1 (褐色土), しまりあり、粘性ややあり、砂質下部カーボン混入
  8. 10YR4/3 (にじい黃褐色土), しまりより、粘性ややあり、カーボン混入
  9. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性あり、カーボン混入
  10. 10YR6/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  11. 10YR3/1 (黒褐色土), しまりあり、粘性あり
  12. 10YR6/3 (にじい黃褐色土), しまりあり、粘性あり、砂を多く混入する
  13. 10YR5/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  14. 10YR4/1 (褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  15. 10YR2/1 (褐色土), ブロック
  16. 10YR5/1 (褐色土), 砂質ブロック
  17. 10YR6/2 (灰黄褐色土), 砂質土ブロック
  18. 10YR2/1 (褐色土), ブロック
  19. 10YR6/2 (褐色土), 砂質ブロック
  20. 10YR6/2 (灰黄褐色土), 砂質ブロックで 19 よりもキメ細かい
  21. 10YR4/1 (褐色土), しまりあり、粘性あり、カーボン混入
  22. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  23. 10YR2/2 (褐色土), しまりより、粘性ややあり、細かい砂多く混入、カーボン混入
  24. 10YR5/1 (褐色土), しまりより、粘性ややあり、粘性弱、砂質土
  25. 10YR6/2 (灰黄褐色土), しまり弱、粘性弱、砂質ブロック
  26. 10YR2/1 (黒褐色土), しまりあり、粘性あり
  27. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性あり、やや 28 よりも砂が少ない
  28. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性あり
  29. 10YR3/2 (褐色土), しまりより、粘性あり
  30. 10YR6/2 (灰黄褐色土), 砂質ブロック
  31. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性ややあり、砂質ブロック
  32. 10YR4/4 (褐色土), しまりあり、粘性あり、褐色土ブロック
  33. 10YR6/6 (明黄褐色土), 40 と似ているがややローム質土が多い
  34. 10YR6/8 (明黄褐色土), 40 と同質土
  35. 10YR2/1 (黒褐色土), しまりあり、粘性あり
  36. 10YR6/2 (灰黄褐色土), しまり弱、砂質ブロック
  37. 10W4/2 (灰黄褐色土), しまりあり、粘性ややあり、砂質ブロック
  38. 10YR2/1 (黒褐色土), しまりあり、粘性あり
  39. 10YR4/3 (にじい黄褐色土), しまりあり、粘性あり、カーボン混入
  40. 10YR6/8 (明黄褐色土), しまりあり、粘性強、ローム質ブロック多く混入
  41. 7.5YR7/1 (明黄褐色土), 砂層 (キメ細かい)



tr22-3 平面図及びセクション図 (1/40)

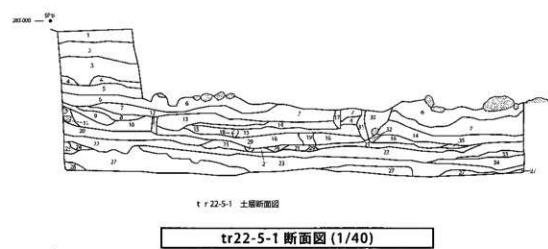
tr22-3	
1.	耕土
2.	10YR7/6 (明黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン・瓦混入、鉄分かたまり黒色粒子混入、黄色上源人 (底土)
3.	10YR6/6 (明黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、瓦混入、黄色土源人 (底土)、鉄分かたまり黒色粒子多く混入
4.	10YR3/2 (黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入、土壌混入、瓦片上部に混入
5.	10YR5/6 (明黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、黄色土源人、鉄分かたまり黒色粒子・黃色土混入
6.	10YR4/4 (褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、瓦多く混入、カーボン混入、鉄分かたまり黒色粒子混入
7.	10YR6/2 (灰黃褐色土)、しまりややあり、粘性弱い、砂層、鉄分のかたまり黒色粒子混入
8.	10YR4/1 (褐色土)、しまり弱い、粘性弱い、砂群 (粒子あらい)







tr22-5-1, 5-3 平面図 (1/40)



## tr 22-5-1

1. 製作土.
2. IOYR6/6(明黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, 水田疊上
3. IOYR4/1(褐褐色土), しまりあり, 粘性あり, 水田疊土下層
4. IOYR6/6(明黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, 瓦片混入、中證~近證水田疊土
5. IOYR5/6(黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, 瓦片混入、カーボン混入、4 番木出来土下層土では土の粒混入
6. IOYR2/2(黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入、礫混入(こぶし大~人頭大)寺本基礎地盤面
7. IOYR4/4(黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入、カーボン混入
8. IOYR3/3(褐褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
9. IOYR5/2(灰黄褐色土), しまりあり, 粘性弱, 砂多く混入、カーボン混入
10. IOYR4/3(灰黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
11. IOYR4/2(灰黃褐色土), しまりあり, 粘性あり, 黄色小ブロック混入、礫混入
12. IOYR4/4(褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入、燒土或赤色小ブロック混入
13. IOYR4/3(にじく黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
14. IOYR3/1(灰褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
15. IOYR4/3(にじく黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
16. IOYR2/3(黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
17. IOYR6/6(黒褐色土), ブロック
18. IOYR2/3(褐褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, ブロック(赤茶色の小ブロック混入上)
19. IOYR3/1(黑褐色土), 1.6mに砂が多く混入したようなブロック
20. IOYR3/1(黒褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入
21. IOYR2/1(褐色土), しまりあり, 粘性強, シルト層
22. IOYR2/2(灰黃褐色土), しまりあり, 粘性あり, 灰色シルト層
23. IOYR2/1(褐色土), しまりあり, 粘性強, シルト層
24. IOYR4/2(灰黄褐色土), しまりややあり, 粘性あり, シルト混入の砂質上ブロック
25. IOYR7/2(にじく黄褐色土), しまり弱, 粘性弱, 砂層ブロック
26. IOYR4/1(褐褐色土), しまりややあり, 粘性あり, シルトブロック
27. IOYR7/1(灰白色土), しまりぬ, 粘性弱, 砂層(堆山)
28. IOYR4/1(褐褐色土), しまり弱, 粘性あり, シルトブロック
29. IOYR4/2(灰黄褐色土), ブロック
30. IOYR4/3(にじく黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, 小砂混入
31. IOYR4/1(褐褐色土), しまりあり, 粘性あり, ピットの削落層
32. IOYR2/1(黑色土), しまりあり, 粘性ややあり
33. IOYR2/1(褐色土), しまりあり, 粘性強, シルト
34. IOYR4/2(灰黃褐色土), しまりあり, 粘性あり, 灰色シルトで砂を多く混入
35. IOYR7/1(灰白色土), 砂ブロック

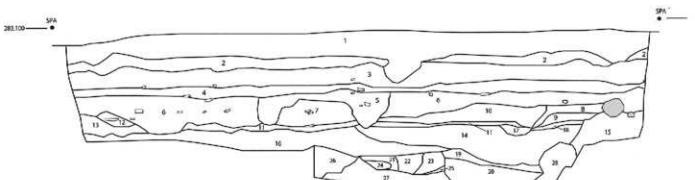
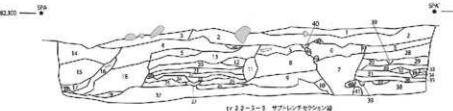


図22-5-3 東壁土層断面図

tr22-5-3 断面図 (1/40)



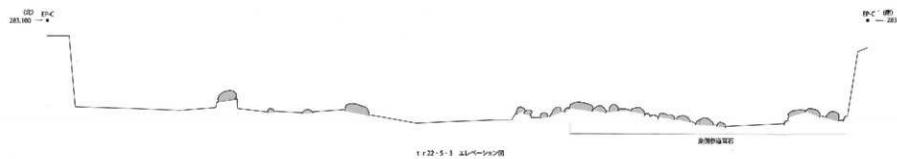
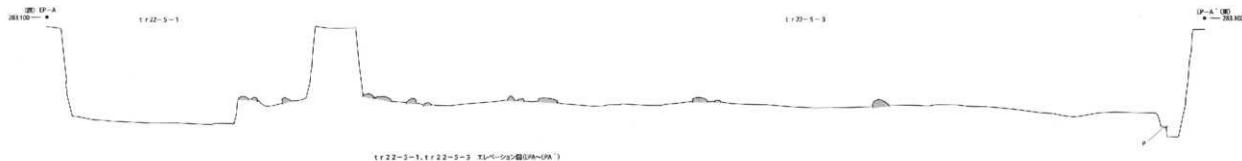
tr22-5-3 サブトレンチ断面図 (1/40)

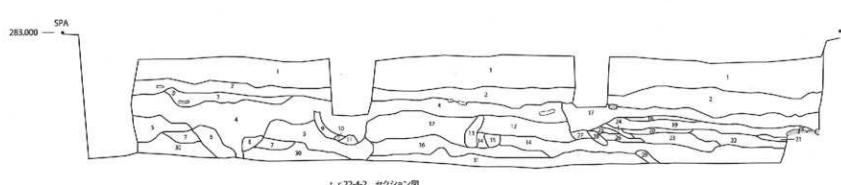
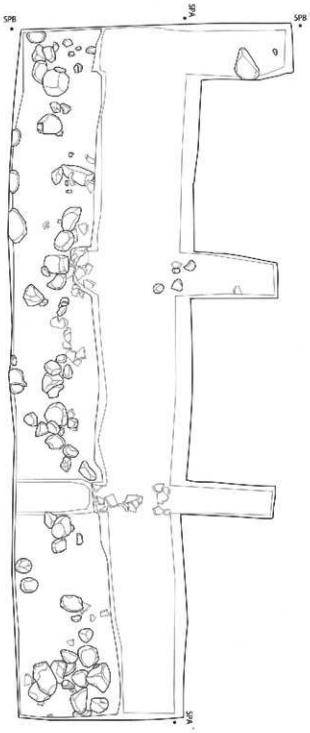
Page 22

- 耕作土  
2. 7.5YR5/6(明褐色土)、しまりあり、粘性あり、近現代水田黒土  
3. 10YR6/8(明褐色土)、しまりややあり、粘性弱い、砂質弱い  
4. 10YR6/8(明褐色土)、しまりあり、粘性弱い、水田床土、IV層、下面に直立土  
5. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、瓦、カーボン、混入、水の影響で色化  
6. 10YR3/3(暗褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、礫が散在する面、瓦层、瓦は礫の上を中心で瓦薄い、礫面も薄く、重りはあまりなられない、茶褐色土を含む層でⅣ層相当と思われる。尚、礫が多い部分は土がシルト化している  
7. 10YR3/3(暗褐色土)、しまりあり、粘性ややあり  
8. 10YR3/4(暗褐色土)、しまりややあり、粘性弱い、IV層相当、砂基  
9. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、砂基粘土だが、やはりシルト化  
10. 10YR4/4(に)[灰黄色土]、しまり強く、粘性あり、茶褐色土を含む、基礎地盤(福島地盤)か  
11. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト質、基礎地盤風の段下層か  
12. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりややあり、粘性ややあり、カーボン・混入层  
13. 10YR3/3(暗褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入  
14. 10YR2/3(黒褐色土)、しまりややあり、粘性あり、寺本前庄住居の覆土か、カーボン混入  
15. 10YR5/3(に)[灰黄色土]、しまり強く、粘性弱い、砂基弱い、砂基、地盤層  
16. 10YR4/3(に)[灰黄色土]、しまりあり、粘性あり、オニタカラの住居隕土、オニタカラ片混入  
17. 10YR4/2(灰褐色土)、しまりあり、粘性弱い、カーボン・焼土粒混入  
18. 10YR4/3(に)[灰黄色土]、しまりあり、粘性あり、カーボン・黄土粒混入  
19. 10YR7/3(に)[灰褐色土]、しまりややあり、粘性弱い、砂質弱い  
20. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりややあり、粘性あり、シルト質  
21. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、カーボン混入、砂とシルト合層  
22. 10YR3/1(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入、砂とシルト混合層  
23. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、砂とシルト合層、寺本前庄  
24. 10YR2/1(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルトブロック  
25. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト  
26. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入、寺本前庄隕土  
27. 10YR7/4(に)[灰黄色土]、しまりややあり、粘性弱い、寺本前庄隕土の表面層、砂とシルトの混合層  
28. 10YR4/1(灰褐色土)、しまりややあり、粘性弱い、寺本前庄隕土の表面層、砂とシルトの混合層

1-3-3-5-3 プラス1心透

1. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入、礫混入、寺本地葉層  
2. 10YR3/3(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入、寺本地葉層、礫混入  
3. 10YR3/3(暗褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入、礫混入、寺本地葉層  
4. 10YR3/3(暗褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入  
5. 10YR3/3(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入  
6. 10YR4/3(にふい黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン・鐵土・銹土混入  
7. 10YR4/2(灰褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、土壌(土壌前)、礫土、カーボン・鐵土・銹土  
8. 10YR4/2(灰褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン・土壌  
9. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、カーボン混入、シルト質層  
10. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト質層  
11. 10YR4/3(にふい黄褐色土)、しまりあり、カーボン・小礫・鐵土・黑色シルト混入  
12. 10YR3/1(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト混入  
13. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入  
14. 10YR4/4(褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、寺本崩落帯  
15. 10YR4/2(灰褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン・土壌・寺本崩落帯  
16. 10YR5/3(にふい黄褐色土)、しまりややあり、粘性弱鉄質土・土解剖面  
17. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性やや  
18. 10YR3/3(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入、寺本崩落帯  
19. 10YR3/3(黑褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入、シルト層  
20. 10YR3/3(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入、シルト層  
21. 10YR3/3(暗褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト層  
22. 10YR1/1(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト層  
23. 10YR3/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト層  
24. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、黒色シルトと砂層の混合層  
25. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、黒色シルトと砂層の混合層  
26. 10YR3/3(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入  
27. 10YR3/3(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入  
28. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入  
29. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト層  
30. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト層  
31. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト層  
32. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト層  
33. 10YR2/2(黒褐色土)、粘性あり、シルト層  
34. 10YR7/3(にふい黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト層  
35. 10YR2/1(黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、シルト層  
36. 10YR5/3(にふい黄褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト層  
37. 10YR7/2(にふい黄褐色土)、しまりややあり、粘性高い、あらい砂層  
38. 10YR2/2(黒褐色土)、しまりあり、粘性あり、シルト層  
39. 10YR3/3(黒褐色土)、シルト質ブロック  
40. 10YR3/3(黒褐色土)



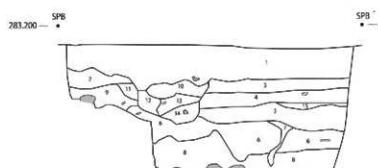


tr 22-4-2

1. 10YR5/6 (黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入, やや古い耕作土
3. 10YR4/4 (褐色土), しまりあり, 粘性あり, 水田床土, 下層, 反覆土, カーボン混入
5. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 砂基層, カーボン混入
7. 10YR5/2 (灰黃褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 砂基層
9. 10YR6/2 (灰黃褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 砂質土, カーボン混入
11. 10YR5/3 (灰褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 砂基層
13. 10YR3/1 (黑褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
15. 10YR3/2 (黑褐色土), しまりあり, 粘性ややあり
17. 10YR5/4 (にぶい黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, 少量混入
19. 10YR2/3 (黒褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン・少量混入, 土師片混入
21. 10YR3/2 (黑褐色土), しまりあり, 粘性あり
23. 10YR4/2 (灰褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入
25. 10YR4/2 (褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入
27. 10YR2/2 (黑褐色土), しまりあり, 粘性あり
29. 10YR6/6 (明黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 砂基層ブロック
31. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりあり, 粘性あり, シルト

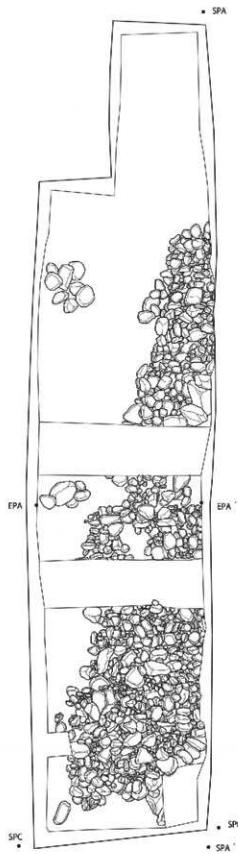
2. 10YR6/6 (明黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, 反覆土, 中層~近世水田床土層IV層
4. 10YR3/4 (暗褐色土), しまりあり, 粘性弱, カーボン混入 (V層)
6. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 伊勢瀬, カーボン多く混入
8. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン少ないが混入
10. 10YR4/1 (褐灰土), しまりややあり, 粘性ややあり
12. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりややあり, カーボン含む
14. 10YR2/3 (暗褐色土), しまりあり, 粘性あり
16. 10YR3/1 (黒褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン少量含む
18. 10YR3/1 (黒褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入
20. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入
22. 10YR3/1 (黒褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン・土師片混入
24. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりあり, 粘性あり
26. 10YK3/1 (黑褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン含む
28. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土), しまりあり, 粘性あり
30. 10YR5/2 (灰褐色土), しまりややあり, 粘性弱, 砂利地山層

tr22-4-2 断面図 (1/40)

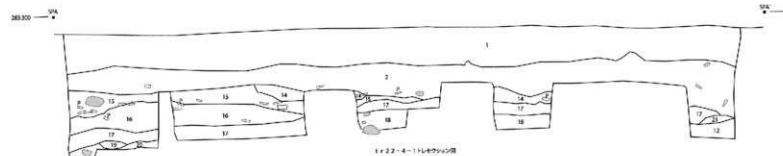


tr 22-4-2

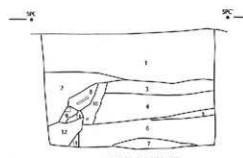
1. 耕作土
2. 10YR5/6 (黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入, やや古い耕作土 (新水田層以降~現在の層)
3. 10YR5/4 (にぶい黄褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入, やや古い耕作土 (新水田以降~現在)
4. 10YR6/6 (明褐色土), しまりあり, 粘性あり, カーボン混入, Ⅲ耕作土, 反覆土
5. 10YR3/4 (暗褐色土), しまりあり, 粘性弱, カーボン混入, 土師片混入
6. 10YR2/3 (黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 砂基層, カーボン混入, 土師片混入
7. 植物根
8. 10YR5/2 (灰黃褐色土), のじり層, 粘性弱, 砂層, 地山層
9. 10YR4/2 (灰褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入, 反覆土, 石塊のある層の覆土
10. 10YR3/2 (灰褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入, 反覆土, 土師片所多混入, 黒色粒子, 鉄分混入
11. 10YR3/2 (黒褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン少量混入
12. 10YR5/6 (黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 床土の黄色粒子多く混入, カーボン少量混入
13. 10YR5/6 (黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, 床土の黄色粒子多く混入, カーボン多く含む, 反覆土
14. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン多く混入, 磨盤土
15. 10YR5/6 (黄褐色土), しまりあり, 粘性ややあり, カーボン混入, Ⅲ耕作土の影響受ける層



tr22-4-1 平面図 (1/40)



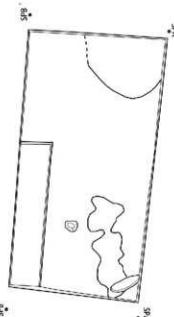
tr22-4-1 セクション図 (1/40)



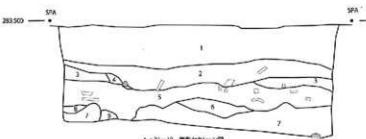
tr22-4-1 エレベーション図 (1/40)



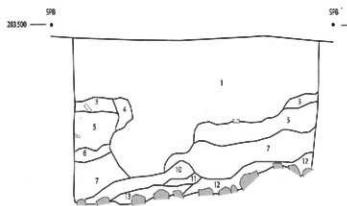
- tr22-4-1
1. 7.5YR5/8 (明褐色土), しまりあり, 黏性あり, 硬耕作土と上層水田灰土の混合層, 壤表土
  2. 7.5YR3/1 (暗褐色土), しまりあり, 黏性ややあり, 土師小片混入, カーボン混入, 溝状遺構
  3. 10YR7/6 (明褐色土), しまりあり, 黏性あり, 水田(Ⅱ輪田水田)床土, (Ⅲ耕)
  4. 10YR7/6 (明褐色土), しまりあり, 黏性あり, 砂基層, 茶褐色土層入
  5. 7.5YR4/3 (褐色土), しまりあり, 黏性弱い, 砂基層, 茶褐色土層よりもやや多く混入
  6. 7.5YR3/1 (暗褐色土), しまりあり, 黏性ややあり, 硬塑層で茶褐色土多く混入
  7. 7.5YR7/1 (明褐色灰), しまり弱い, 黏性弱い, 粒子のあらい砂層
  8. 7.5YR4/3 (茶褐色土), しまりあり, 黏性ややあり, 水田床土の黄色粒子・カーボン・布目瓦混入
  9. 10YR7/6 (明褐色土), 水田灰土ブロック, 布目瓦混入
  10. 10YR5/6 (黄褐色土), しまりあり, 黏性ややあり, カーボン・水田灰土の黄色粒子混入
  11. 7.5YR2/1 (黒褐色土), しまりあり, 黏性ややあり, カーボン・水田灰土の黄色粒子混入
  12. 7.5YR2/1 (黒褐色土), しまりあり, 黏性あり, カーボン・布目瓦混入
  13. 7.5YR3/2 (黒褐色土), しまり弱い, 黏性弱い, 砂基層に茶褐色土層入
  14. 7.5YR5/4 (にじみ褐色土), しまりややあり, 黏性弱い, 砂基層で灰粒子・瓦混入
  15. 7.5YR4/1 (褐色土), しまりややあり, 黏性弱い, カーボン・布目瓦・水田灰土粒子混入
  16. 7.5YR4/1 (褐灰色土), しまりあり, 黏性ややあり
  17. 10YR4/3 (にじみ黄褐色土), しまり弱い, 黏性弱い, 砂基層
  18. 7.5YR4/4 (褐色土), しまり弱い, 黏性弱い, 破片
  19. 10YR5/4 (灰褐色土), しまりややあり, 黏性弱い, あらい砂層
  20. 10YR5/4 (にじみ褐色土), しまりあり, 黏性弱い, 硬かしい砂基層で混入
  21. 10YR5/6 (黄褐色土), 水田灰土ブロック



tr21-10 平面図及び断面図 (1/40)

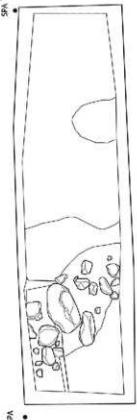


1 x 21-10 断面セクション図

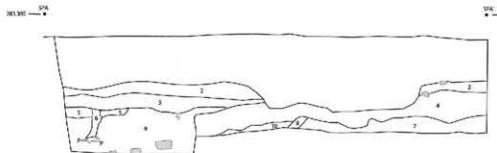


1 x 21-10 断面セクション図

- tr 2 1 - 1 0
1. 7.5YR4/1 (褐色土)、しまりやあり、粘性ややあり、耕作土
  2. 7.5YR4/4 (褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン多く含む、根立部あり
  3. 10YR7/6 (黄色土上)、しまりあり、粘性あり、カーボン・茎含む、水田灰土
  4. 10YR5/6 (黄色土上)、しまり弱、粘性ややあり、3層が2層に切られた際の崩落
  5. 10YR4/4 (褐色土)、しまり強、粘性ややあり、砂基層で茶色土混入、瓦多く混入、カーボン混入、寺本の生活面
  6. 10YR2/2 (灰黄褐色土)、しまりあり、粘性弱、砂基層
  7. 10YR2/2 (褐色土上)、しまりあり、粘性弱、砂基層
  8. 10YR5/4 (にぶく黄色土上)、しまりややあり、粘性弱、砂フロック
  9. 10YR5/4 (にぶく黄色土上)、しまりややあり、粘性弱、砂フロック
  10. 10YR4/1 (褐色土上)、しまり、粘性弱、やや泥の性質弱く、くすんでいる
  11. 2.5YR7/3 (浅黄色土上)、しまり、粘性弱、砂層で干め細かい
  12. 10YR5/2 (褐色土上)、しまり弱、粘性弱、砂層
  13. 10YR5/1 (褐色土上)、しまり弱、粘性弱、砂層

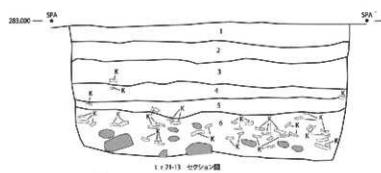
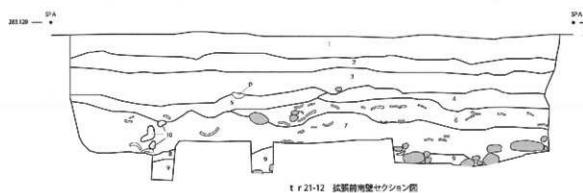
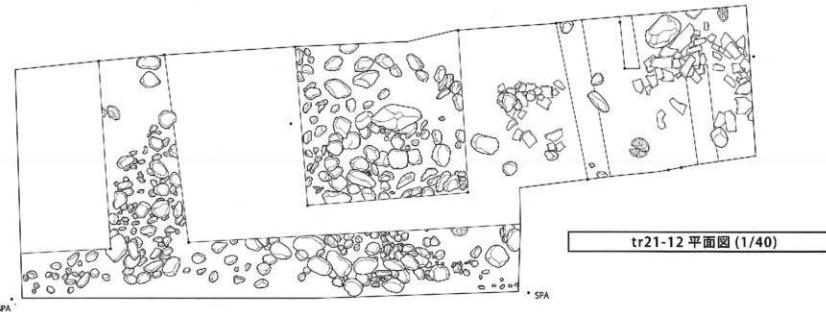


tr22-4-4 平面図 (1/40)



tr 22-4-4 セクション図 (1/40)

- tr 2 2 - 4 - 4
1. 耕作土
  2. 10YR6/6 (明褐色土)、しまりあり、粘性あり、直解・カーボン・瓦混入
  3. 10YR4/4 (褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン混入
  4. 10YR3/2 (暗褐色土)、しまりややあり、粘性ややあり、砂基層、カーボン・土師片混入
  5. 10YR4/6 (褐色土)、しまりあり、粘性あり、瓦混入、堅地層の名残か、カーボン混入
  6. 砂基層
  7. 10YR6/3 (にぶく黄褐色土上)、砂層
  8. 10YR3/2 (黒褐色土)、しまり弱い、粘性弱い、カーボン混入
  9. 10YR3/2 (黒褐色土)、しまりあり、粘性ややあり、カーボン・人頭大礫・土師片混入・住居覆土
  10. 10YR5/5 (灰褐色土上)、しまり弱い、粘性弱い、砂層

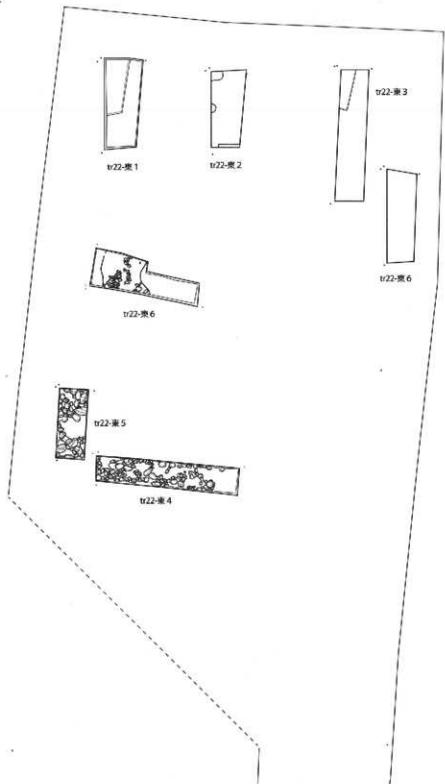


tr 21-1-2

1. 10YR3/2 (淡褐色土)、しまり弱、粘性弱、耕作土
2. 10YR4/2 (にぶい黄褐色土)、しまりやあり、粘性弱、砂基調、黄色砂ブロック混入
3. 7.5YR3/2 (黒褐色土)、しまりややあり、粘性弱、砂基調、カーボン混入
4. 7.5YR4/1 (深褐色土)、しまりややあり、粘性弱、瓦、カーボン型入、砂基調
5. 7.5YR3/1 (黒褐色土)、しまりややあり、粘性弱、瓦、カーボン混入が4層よりやや多い、砂基調
6. 10YR4/2 (灰褐色土)、しまりややあり、粘性弱、砂基調、茶色ブロック(鉄分)が混入する、瓦が多く出土する。カーボン混入
7. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土)、しまりあり、粘性弱、砂基調
8. 10YR4/3 (深褐色土)、しまりあり、粘性弱、砂基調
9. 10YR3/2 (黒褐色土)、しまりあり、粘性弱、砂基調、くすんだ砂質ブロック

tr 21-1-3

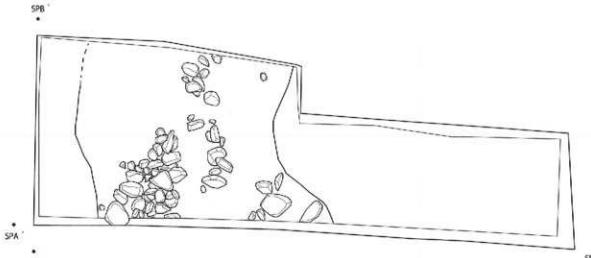
1. 耕作土
2. 7.5YR6/8 (褐)、しまり、粘性あり、水田底土
3. 7.5YR 4/2 (灰褐色)、しまりややあり、粘性弱、砂基調、カーボン混入
4. 7.5YR4/4 (褐)、しまりややあり、粘性弱、砂基調
5. SYR3/1 (黒褐)、しまり、粘性あり、砂基調、黄色ブロック混入、小礫、カーボン混入
6. 7.5YR3/2 (黒褐)、しまりややあり、粘性弱、黄色ブロック混入、小礫、カーボン混入



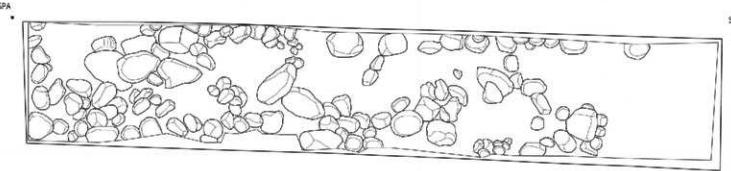
tr22- 東 1 ~ 7 平面図 (1/200)



tr22- 東 5

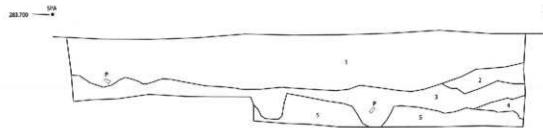


tr22- 東 7 平面図 (1/40)



tr22- 東 4

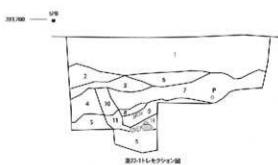
tr22- 東 4、東 5 平面図 (1/40)



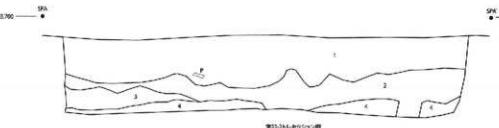
tr22-1セクション図

- t r 22-1 東 1
1. 7.5YR3/2(褐褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調
  2. 10YR4/4(褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調で1層よりもキメがあらい
  3. 10YR5/4(にぶい黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調、Ⅱ層よりもキメこまかい
  4. 2.5Y6/4(にぶい黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調Ⅳ層よりもキメあらい
  5. 2.5Y6/6(明黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調Ⅳ層よりもキメあらい
  6. 2.5Y7/3(黄褐色土), 砂つまり、キメあらい
  7. 10Y4/1(褐褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調でキメあらい
  8. 2.5Y7/3(オリーブ褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調、キメあらい
  9. 2.5R4/4(オリーブ褐色土), しまり弱い、粘性弱い、キメあらい、砂基調
  10. 10Y4/4(にぶい黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、キメあらい
  11. 2.5Y3/2(褐褐色土), しまり弱い、粘性弱い、こじし大結合

tr22- 東 1 セクション図 (1/40)



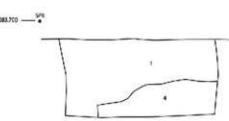
tr22-11セクション図



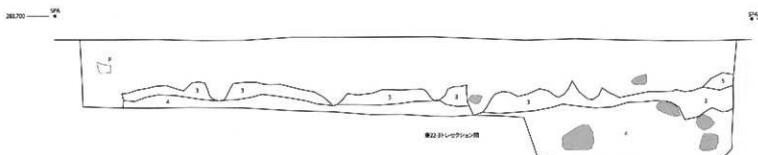
tr22-2セクション図

- t r 22-2 東 2
1. 7.5YR3/2(褐褐色土), しまり弱い、粘性弱い、耕作土、砂基調
  2. 10YR4/2(灰多褐色土), しまりややあり、粘性弱い、砂基調、キメ1よりあらい
  3. 2.5Y6/6(明黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調、キメ2よりあらい
  4. 2.5Y5/4(黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、キメのあらい砂層

tr22- 東 2 セクション図 (1/40)



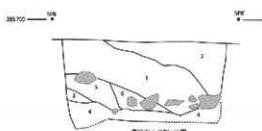
tr22-29セクション図



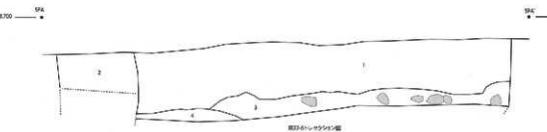
tr22-3セクション図

- t r 22- 東 3
1. 10YR4/2(灰黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、耕作土、カーボン・根混入
  2. 10YR4/2(灰黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、耕作土・根混入、カーボン・根混入
  3. 2.5Y6/8(明黄褐色土), しまりややあり、粘性弱い、砂層でキメややあらい
  4. 砂礫層
  5. 2.5Y4/2(暗褐色土), しまり弱い、粘性弱い、鉄分混入、砂基調、キメあらい
  6. 2.5Y3/2(黒褐色土), しまり弱い、粘性弱い、カーボン・根混入、砂基調、根孔

tr22- 東 3 セクション図 (1/40)



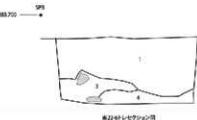
tr22-39セクション図



tr22-4セクション図

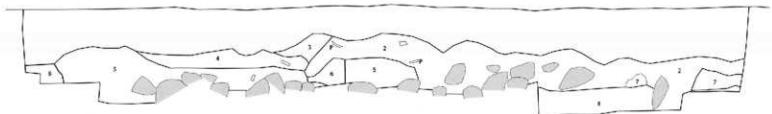
- t r 22- 東 6
1. 10YR4/2(灰多褐色土), しまり弱い、粘性弱い、砂基調、耕作土
  2. 根混(日トレンチ)
  3. 2.5Y6/8(明黄褐色土), しまりややあり、粘性弱い、砂層できめややあらい
  4. 10YR4/2(灰黄褐色土), しまり弱い、粘性弱い、くすんだ砂層、キメあらい

tr22- 東 6 セクション図 (1/40)



tr22-49セクション図

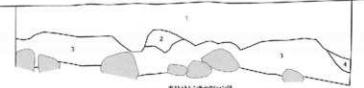
288/20



tr22 東-4

1. 10YR4/2 (灰黄褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 稲作土
2. 10YR6/4 (にぶい黃褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 砂層, キメあらか, カーボン混入
3. 10YR4/3 (にぶい黃褐色土), しまりややあり, 粘性弱い, 砂層でカーボン混入
4. 2.5Y5/5 (黄褐色土), しまりややあり, 粘性弱い, キメあらい, 砂基層, 中世以降の甃土
5. 2.5Y7/3 (にぶい黃褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 破片だまり
6. 10YR3/3 (暗褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 寺本生活面の上層か(萍を検出している), 茶色鉄子混入
7. 10YR3/2 (暗褐色土), しまりややあり, 粘性弱い, 但トレンドででている黄色砂層, これを地山層とする
8. 2.5Y7/6 (羽黄褐色土), しまりややあり, 粘性弱い, 但トレンドででている黄色砂層, これを地山層とする

tr22 東-4 セクション図 (1/40)



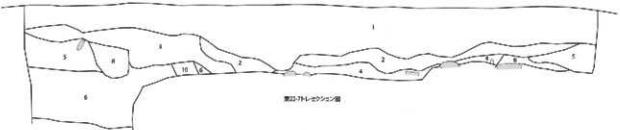
tr22 東-4

1. 稲作土
2. 2.5Y6/3 (にぶい黃褐色土), 砂層
3. 2.5Y6/3 (にぶい黃褐色土), 砂層, 2よりやや細まる
4. 稲作に伴う粗乱部

tr22 東-4 セクション図 (1/40)

17.00

19.00



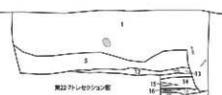
tr22 東-7

1. 10YR4/1 (灰褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 稲作土 (砂基層)
2. 2.5Y4/3 (オリーブ褐色土), しまりややあり, 粘性弱い, キメあらい, カーボン混入
3. 10YR4/1 (褐土色), しまりややあり, 粘性弱い, 砂基層, キメあらか, カーボン混入
4. 10YR3/1 (黒褐色土), しまりあり, 粘性弱い, 砂基層, キメやや細かい, 甃・瓦・中世土器, 古墳土器混入
5. 2.5Y5/1 (黄褐色土), しまりあり, 粘性弱い, 砂基層, カーボン混入
6. 2.5Y6/8 (暗褐色土), しまりあり, 粘性弱い, 砂基層, ややキメこまかい
7. 矢
8. 2.5Y4/4 (オリーブ褐色土), しまりあり, 粘性弱い, 砂基層でキメあらい
9. 矢
10. 10YR3/1 (黑褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 砂基層, キメあらい
11. 穀殻
12. 10YR4/2 (灰褐色土), しまりややあり, 粘性やや弱い, 砂基層
13. 2.5Y7/3 (淡黄褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 砂層だまり
14. 2.5Y3/2 (黄褐色土), しまりややあり, 粘性弱い, キメこまかい, 砂基層
15. 2.5Y5/3 (黄褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, 砂層だまり
16. 2.5Y2/1 (黑褐色土), しまりややあり, 粘性やや弱い, キメ細かい, 砂基層
17. 2.5Y4/3 (オリーブ褐色土), しまりややあり, 粘性やや弱い, キメこまかい砂基層
18. 2.5Y3/2 (暗褐色土), しまり弱い, 粘性弱い, キメあらい

tr22 東-7 セクション図 (1/40)

17.00

19.00



tr22 東-7 セクション図

報告書抄録

ふりがな	てらもとはいじあと
書名	寺本廃寺跡
副書名	山梨県史跡寺本廃寺跡 試掘調査報告書
シリーズ	笛吹市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第27集
編著者名	望月和幸
編集機関	笛吹市教育委員会
所在地	〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部 809-1 TEL.055-261-3342
発行年月日	2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
てらもとはいじ 寺本廃寺跡	やまなしけんええふきし 山梨県笛吹市 かすがいちょうてらもと 春日居町寺本地内	251		35° 39° 50.7°	138° 39° 10.3°	2008.2 5 2011.3		遺稿確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺本廃寺跡	古代寺院 (県史跡)	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世・近世	金堂基壇(版築) 講堂基壇(硬化面) 中門(地業跡) 南門(崩落瓦) 参道耳石 甕石遺構 中世溝 竪穴式住居跡 (古墳時代) 竪穴式住居跡 (平安時代)	布目瓦 土師器 須恵器 かわらけ 陶磁器 墨書き土器(神院)ほか	

笛吹市文化財調査報告書 第27集

寺本廃寺跡

発行日 平成24年3月31日

発行 笛吹市教育委員会

印刷 相互印刷株式会社

# Teramoto-Haiji

The Report of Archaeological Test Survey of  
An Ancient Temple Ruins in Teramoto, Kasugai

2012, 3

Fuefuki City Board of Education